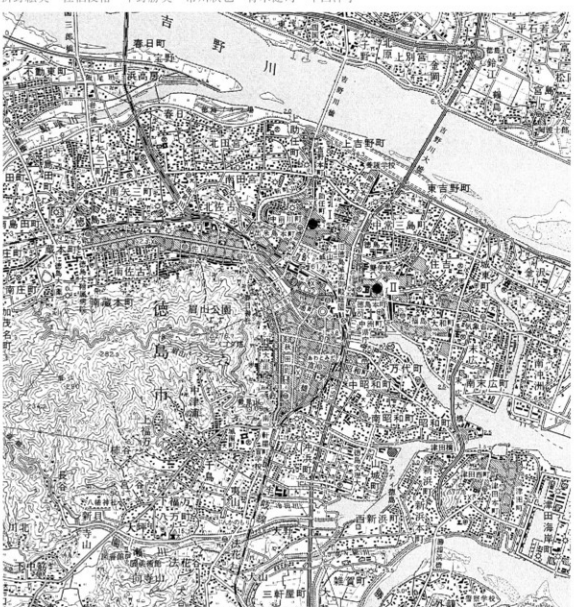
徳島市埋蔵文化財発掘調査概要20

2010. 3

徳島市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成17・20年度に実施した２遺跡２件の発掘調査概要報告書である。
2　報告書作成の費用は、徳島市教育委員会の負担による。
3　発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
4　本書の編集・執筆は勝浦が行った。
5　木器の保存処理は、株式会社京都科学に委託した。
6　遺構写真・遺物写真の撮影は、勝浦が行った。
7　発掘調査で得られた遺物、その他の資料は、すべて徳島市教育委員会が保管している。
8　本書の作成に係る作業には、調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。
　折野絵美　佐伯俊裕　中野勝美　市川欣也　青木健司　中西洋子



調査地位置図（S＝１：50,000）
Ⅰ　徳島城下町跡（前川）　Ⅱ　徳島惣構跡

本 文 目 次

Ⅰ　徳島城下町跡（前川）
1　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
2　調査に至る経緯と経過 …… 1
3　基本層序 …… 3
4　調査概要 …… 3
(1)　土壙 SK01 …… 5
(2)　土壙 SK02・03 …… 8
(3)　落込 SX01 …… 13
(4)　土壙 SK04 …… 13
(5)　土壙 SK05 …… 14
(6)　土壙 SK06 …… 16
5　小結 …… 19

Ⅱ　徳島惣構跡
1　遺跡の立地と歴史的環境 …… 21
2　調査に至る経緯と経過 …… 22
3　基本層序 …… 22
4　調査概要 …… 24
(1)　土壙 SK01 …… 24
(2)　土壙 SK02 …… 27
(3)　土壙 SK03・04 …… 31
(4)　土壙 SK05 …… 31
(5)　土壙 SK06 …… 31
(6)　土壙 SK07 …… 31
(7)　土壙 SK08～12 …… 31
(8)　土壙 SK13 …… 34
(9)　溝 SD01～03 …… 34
(10)　井戸 SE01～03 …… 35
5　小結 …… 35

図版目次

挿図目次

図 版 目 次

Ⅰ　徳島城下町跡（前川）

図版１　上：調査地Ⅰ区（後方に城山を望む）
　　下：調査地Ⅰ区全景
図版２　上：調査地Ⅰ区東壁断面
　　下：調査地Ⅱ区全景
図版３　上：土壙 SK01
　　中：土壙 SK01
　　下：土壙 SK01・東壁断面一部
図版４　上：土壙 SK02・03遺物検出状況
　　中：土壙 SK02・03遺物検出状況
　　下：土壙 SK02・03遺物検出状況
図版５　土壙 SK01出土遺物
図版６　土壙 SK01出土遺物
図版７　土壙 SK01出土遺物
図版８　土壙 SK01出土遺物
図版９　土壙 SK02出土遺物
図版10　土壙 SK02出土遺物
図版11　土壙 SK03出土遺物
図版12　土壙 SK03出土遺物
図版13　土壙 SK03出土遺物
図版14　土壙 SK03出土遺物
図版15　土壙 SK03出土遺物
図版16　落込 SX01（162・163）、土壙 SK04（164～166、172～175）、SK05（167～171）出土遺物
図版17　土壙 SK04（176・177）、SK05（178）、SK06（179～194）出土遺物
図版18　土壙 SK06出土遺物
図版19　土壙 SK06出土遺物

Ⅱ　徳島惣構跡

図版１　上：調査地全景（後方に城山を望む）
　　下：調査地全景
　　（後方に徳島城惣構の土手と松並木）
図版２　上：北壁断面堆積状況
　　下：北壁断面堆積状況
図版３　上：土壙 SK02遺物検出状況
　　中：土壙 SK02遺物検出状況
　　下：瓦立遺構 SX01
図版４　上：土壙 SK03・04遺物検出状況
　　中：土壙 SK03・04遺物検出状況
　　下：土壙 SK03・04遺物検出状況
図版５　上：土壙 SK03下面遺構
　　中：土壙 SK03下面遺構
　　下：土壙 SK03下面遺構
図版６　上：溝 SD01遺物検出状況
　　中：溝 SD01遺物検出状況
　　下：溝 SD01遺物検出状況
図版７　上：土壙 SK06
　　中：溝 SD02
　　下：溝 SD03断面
図版８　上：井戸 SE01
　　中：井戸 SE01
　　下：井戸 SE01
図版９　土壙 SK01出土遺物
図版10　土壙 SK01（29～34）、SK02（35～41）出土遺物
図版11　土壙 SK02出土遺物
図版12　土壙 SK02出土遺物
図版13　土壙 SK02出土遺物
図版14　土壙 SK02出土遺物
図版15　土壙 SK02出土遺物
図版16　土壙 SK02出土遺物
図版17　土壙 SK02出土遺物
図版18　土壙 SK03（106～115）、SK04（116～119）、SK05（120～123）、SK06（124～130）出土遺物
図版19　土壙 SK06（131・132）、SK07（133～141）、SK08（142・143）、SK09（144）、SK10（145）、SK11（146）出土遺物
図版20　土壙 SK12出土遺物
図版21　土壙 SK13出土遺物
図版22　土壙 SK13出土遺物
図版23　土壙 SK13（152）、溝 SD02（152～161）、SD03（162～166）出土遺物

挿 図 目 次

Ⅰ　徳島惣構跡

図１　調査地の位置と周辺（安政年間「御山下島分絵図」と現在の地形図）
図２　調査地位置図（安政年間「御山下島分絵図」前川と現在の地形図
図３　調査地概略図（安政年間「御山下島分絵図」前川の屋敷割と調査地）
図４　遺構配置図・断面土層図
図５　土壙 SK01出土遺物
図６　土壙 SK01出土遺物
図７　土壙 SK02出土遺物
図８　土壙 SK03出土遺物
図９　土壙 SK03出土遺物
図10　土壙 SK03出土遺物
図11　落込 SX01(162・163)、土壙 SK04(164～166)、SK05（167～171）出土遺物
図12　土壙 SK04・05出土遺物
図13　土壙 SK06出土遺物
図14　土壙 SK06出土遺物

Ⅱ　徳島惣構跡

図１　調査地の位置と周辺（安政年間「御山下島分絵図と現在の地形図）
図２　調査地位置図（安政年間「御山下島分絵図」徳島と現在の地形図
図３　調査地概略図（安政年間「御山下島分絵図」徳島の屋敷割と調査地）
図４　遺構配置図・断面土層図
図５　土壙 SK01出土遺物
図６　土壙 SK02出土遺物
図７　土壙 SK02出土遺物
図８　土壙 SK02出土遺物
図９　土壙 SK03（106～115）、SK04（116～119）出土遺物
図10　土壙 SK05(120～123)、SK06(124～132)、SK07（133～141)、SK08(142・143)、SK09(144)、SK10(145)、SK11(146)、SK12(147)出土遺物
図11　土壙 SK13出土遺物
図12　溝 SD02(153～161)、SD03(162～166)出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
巻次	20
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	勝浦康守
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770－8571　徳島市幸町２丁目５番地　　℡ 088－621－5418
発行年月日	西暦　2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とくしまじょうかまちあと 徳島城下町跡 （前川）	とくしまけんとくしまし なかまえがわちょう 徳島県徳島市 中前川町	36201	－	34度 4分 50秒	134度 33分 7秒	20040901～ 20041031	300	マンション建設工事に伴う事前調査
とくしまゆうかんあと 徳島遊構跡	とくしまけんとくしまし とくしまちょう 徳島県徳島市 徳島町	36201	－	34度 4分 20秒	134度 33分 42秒	20071001～ 20071228	300	マンション建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳島城下町跡 （前川）	城下町跡	近世	土壙・溝	陶磁器・木製品	
徳島遊構跡	城下町跡	近世 中世	土壙・溝・井戸	陶磁器	

Ⅰ　徳島城下町（前川）

1　遺跡の立地と歴史的環境（図１・２）

天正13（1585）年、阿波国の領主となった蜂須賀家政は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。徳島城下町の特徴は、徳島城が築かれた標高61mを測る城山が位置する「徳島」を中心とした旧吉野川下流域のデルタ地帯の島状微高地を利用した島普請である。

今回の調査地である城下町跡・前川は、徳島城の北側、助任川左岸に位置する武家地である。城下町・前川は二重の土手で囲まれた武家地である。正保３（1646）年の「阿波国徳島城之図」では小範囲な武家地として整備され、当初は一重の土手で囲まれていたが、17世紀中葉以降、武家地が助任川の川岸へ拡充する過程において、当初築かれた土手のさらに外側に新たな土手が築かれ二重の土手により屋敷地が囲まれた形態をとる。

安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図」前川では二重の土手の内側の土手には、150～400石の高取藩士である五島太兵衛・林宇兵衛・森久兵衛・長江佐蔵・中村伴助らの名前があり、蜂須賀正勝・家政と縁のある名家の屋敷地が置かれていることから、徳島城下町の建設当初から徳島城の北方の防御を意識する上で重視された地域と考えられる。一方、17世紀中葉以降の屋敷地の拡充に伴い内側土手の外側では、格付けの低い無足や無格者の屋敷地、屋敷主のいない建屋や町人地もみられ、身分階級差による居住区の区別が明確にされる。

今回の調査地は内側の土手内に位置し、安政年間の絵図では徳島藩士林宇兵衛（林家11代）の屋敷地に該当し、文化・文政年間（1804～1829）に遡る絵図においても林屋敷とされる。しかし、天明年間（1781～1788）、享保年間（1716～1735）、元禄年間（1688～1703）の絵図では、井関半左衛門・井関半兵衛の名前があることから、井関から林への屋敷替が行われていることがわかる。

徳島藩士の井関半左衛門・井関半兵衛については、「蜂須賀家・家臣成立書并系図」に記載がなく不明である。

一方、11代林宇兵衛は初代が林図書助（林道感）で、蜂須賀家政の後見人であり天正13年蜂須賀とともに阿波国に入り川島城代（家老職・5500石）を務める名家とされる。ところが、林家は慶長元（1596）年に相続した養子の林内膳が慶長19（1614）年の大坂冬の陣への出陣中の乱心により断絶、元和２（1616）年に道感の隠居料を２代林和泉（500石、後1500石加増）が相続する。さらに、６代林左内（350石）は明和４（1767）年、不行跡に付き知行高家屋共召上げられ、四人御扶持方に降格する。10代林五郎兵衛は文政２（1819）年に先祖の功績が認められ、御小姓役（組士・150石）に格上げされ、この頃、屋敷替により井関屋敷に入るものと考えられる。

2　調査に至る経緯と経過（図３）

今回の調査は、マンション建設工事に伴う事前の発掘調査である。工事計画に基づき事前の試掘調査を実施し遺跡の残存状況を把握した後、事業者と協議を行い工事対象地において調査地Ⅰ・Ⅱ区を設定し調査を実施した。また、遺構確認のため必要に応じ部分拡張調査を実施した。

図1　調査地の位置と周辺（S＝1：20,000）
（安政年間「御山下島分絵図」と現在の地形図）

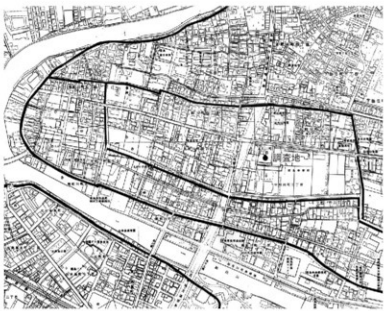


図2　調査地位置図（S＝1：5,000）
（安政年間「御山下島分絵図」前川と現在の地形図）

図3　調査地概略図（S＝1：1,000）
（安政年間「御山下島分絵図」前川の屋敷割と調査地）

3　基本層序（図４、図版２）

調査地周辺の現地表面は標高T.P.＋1.5mを測り、調査地のほぼ全面にわたり撹乱を受けている。現代盛土及び撹乱層下に第１～10層が堆積する。以下、上位より概略する。

第０層：現代盛土及び撹乱層で層厚60cm～１mを測る。

第１層：層厚10～20cmを測る灰色砂礫混じりシルトである。

第1-a層：層厚10～30cmを測る黄灰色シルトと黒色シルトの撹拌層である。

第２層：層厚10cmを測る浅黄色～青灰色細砂混じりシルトである。

第３層：層厚５～15cmを測る灰色砂質シルトである。

第４層：層厚10cmを測るにぶい黄色細～粗砂である。

第５層：層厚10～20cmを測る灰黄色砂質シルトに黄色シルトが混在する。

第６層：層厚40cmを測る灰オリーブ色砂質シルトである。

第６層下に19世紀代後半の遺構が覆われているので、第６層より位層については、明治時代以降の堆積と考えられる。第１～６層は調査地の北及び東壁面で共通した堆積がみられることから、屋敷地内で数回にわたり比較的広い範囲で行われた整地土と考えられる。特に、第１・３層には良質な灰色シルトが使用されていることから、生活面となり得る可能性がある。

第７層：層厚10cmを測る暗灰黄色砂質シルトである。

第８層：層厚15～30cmを測る暗オリーブ色粘土質シルトである。

屋敷地の表側の一部で行われた島状整地（第９層）の周縁部の落込に堆積する土砂で、18世紀代の遺物を含むことから、屋敷地内での土地利用の拡大に伴い落込による段差を平坦化するための整地土と考えられる。

第９層：層厚15cmを測る明青灰色砂質シルト～灰色粘土質シルトで、屋敷造成初期段階に行われた島状整地に使用された土砂である。

第10層：明黄褐色砂質シルトで上面から20cm下位では、浅黄色細～粗砂混じりシルトへ変化し、砂層からの湧水は激しい。

当該地は二重の土手で囲まれた徳島城下町跡・前川の中でも内側の土手内に位置し、従来の調査では良好なシルトの河成堆積がみられる地域でもあるが、ここでは良質なシルトの堆積はみられず粘土質の優勢な軟弱な基盤土層の上に屋敷地が形成される。

4　調査概要（図３、図版１・２）

調査地は江戸時代の元禄年間以降に描かれた幾つかの絵図との照合において、徳島藩士の井関屋敷、また、19世紀前半に行われたと考えられる屋敷替後は林屋敷の裏側の一画に位置することがわかる。今回の調査では、基本層序の第10層上面において、陶磁器等を廃棄するための土壙、溝状遺構、ピットを検出している。また、屋敷地の表側で行われた島状整地の痕跡の一部を確認している。

以下、主な遺構と遺物について概述する。

図4　遺構配置図・断面土層図

(1) 土壙 SK01（図４～６、図版３・５～８）

調査地Ⅰ区の南東部において検出した平面形が方形を呈する板組遺構で、壁面に土留め用の横板を積み、板組内部に60cm等間で打ち込まれた丸杭で板留めを施している。調査地外に広がり規模及び遺構の性格については明確ではない。

出土遺物には、肥前系磁器小坏１～５、碗６～８、皿９、蓋10・11、段重12、蓋物13、御神酒徳利14、瀬戸美濃系磁器碗15、陶器蓋16、皿17、関西系磁器小坏18、碗19～21、蓋22、皿23・24、京信楽系碗25・蓋物26、灯明受皿27、鉢28、産地不明磁器碗29、火入れ30、戸車31、加工円盤32～40、塀・明石系擂鉢41・42、土人形43、泥面子44～47、木簡48、栓49、木刀50、箒51がある。

１は白磁、２～５は染付で、１は口縁部に外面からの敲打による剥離痕が３か所、内側からの敲打による剥離痕が１か所ある。６～８は染付で、６は端反で見込みに鳥文、７は端反で口縁部内面に雷文、８の見込みは蛇の目釉剥ぎである。９～11は染付で、９は輪花型打成形で焼き継ぎ痕があり、外面高台内に「卜八九　＃　廿二七」の透明釉の記号がある。10・11は染付の端反蓋である。12は色絵染付で口縁端部と底部外面の屈曲段部は無釉である。13は染付で口縁端部は無釉である。14は染付で鶴首形である。

15は染付の端反である。16は灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉をかけ、外面には鉄釉と青色釉で文様を描く。17は灰白色の硬質胎土の型押成形で、内外面に灰釉をかけ、口縁端面に鉄釉を塗り、口縁部には部分的に緑釉をかけ流す。内面は鉄絵、底部外面に円形の凹部がある。

18は壁薄で口錆、見込みに文様、畳付無釉である。19～21は染付の端反で、19の見込みは一重圏線内に崩した「壽」、20・21は焼き継ぎ痕があり、20は高台内に「リ七一」、21は高台内に「リ十三」の透明書きの記号がある。22は染付で、畳付無釉である。23は染付、24は輪花型押成形の青磁で、内外面に厚みのある釉をかけ、内面に除刻文様、高台八角形の畳付無釉である。

25は端反で、灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉をかけ、口縁部に緑釉をかけ流し高台無釉である。26は灰色の硬質胎土で、内外面に灰釉をかけ、口縁端面と底部外面は無釉、見込みにハリ目跡がある。27は灰黄色の硬質胎土の内面に灰釉をかけ、外面無釉、内面の仕切りに浅い凹状の切り込みを入れる。28は灰白色の硬質胎土の内外面に黄白色釉をかけ、底部外面は無釉、内雪気味の玉縁状口縁で、見込みに５か所の胎土目跡、体部内面には環状の重ね焼き痕がある。

29は端反で、灰黄色の硬質胎土で口縁端部～内面には白泥、外面は鉄釉と白泥で文様を施し畳付無釉である。30は橙色の軟質胎土で口縁部～外面に柿釉、内面と底部外面は無釉、底部外面に回転糸切り痕があり、口縁部に上方向からの敲打による剥離痕がある。

31は両面に墨書の痕跡があるが不明瞭で判読できない。32～42は瓦片素材で、39は「叉」と「～」の刻印、40は「酒」と天狗が描かれる。

41は擂目の上端がナデで消し揃えられ、体部外面に墨書がある。42は口縁部内面にナデがめぐるが擂目は消し揃えられず、見込みには擂目の放射状文様が施される。

43は前後型合わせの天神で、底部に串穴がある。44～47は型押成形である。

48は「一代の守□尊八□つれや□の」と釈読できるが、意味不明である。

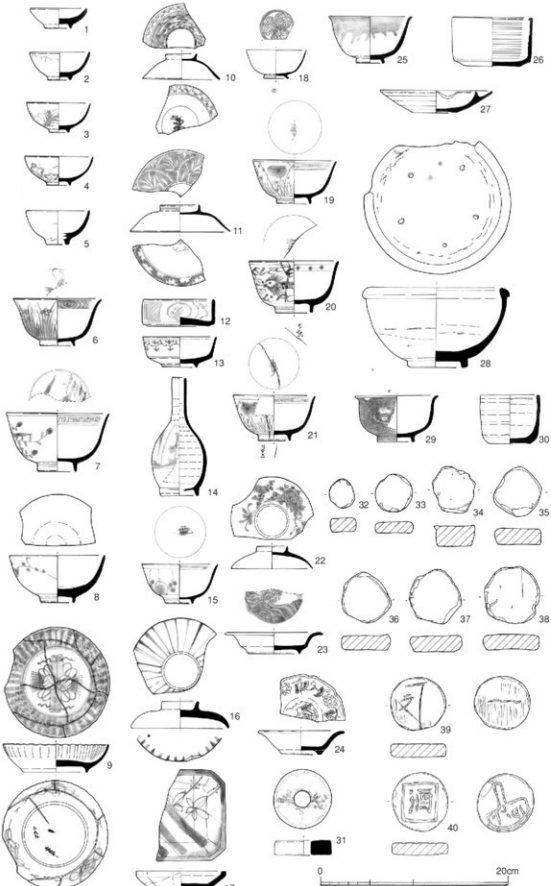


図5　土壙 SK01出土遺物

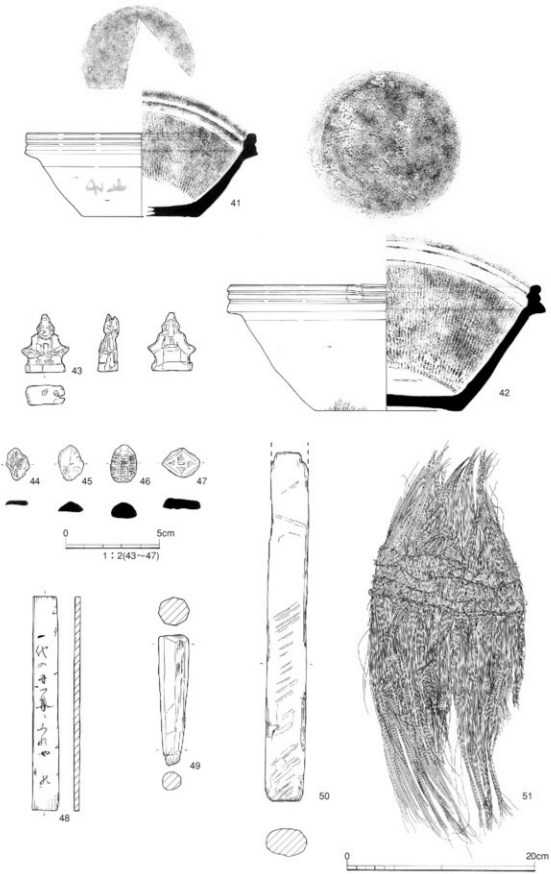


図６　土壙 SK01出土遺物

(2) **土壙 SK02・03**（図４・７～10、図版４・９～14）

東壁面においてSK02の一部を確認し、断面観察から遺物を多量に含む廃棄土壙の可能性が考えられたため、遺構把握のため部分拡張を行った。拡張調査ではSK02と新旧の切り合い関係のあるSK03を検出している。

SK02は平面形が長径1.8m、短径１mの長方形を呈し、また、SK03は一辺1.6mの方形を呈する廃棄と考えられるがSK02と切り合い関係をもつ。いずれも陶磁器・瓦が充満した切り合い関係を呈す遺構であり新旧関係の把握には困難さを伴い、遺物の取り上げ作業時についても厳密な分別には至らず、発掘調査後の整理作業において遺構間で一部遺物の接合がみられる。

SK02出土遺物には、肥前系磁器碗52・53・71、蓋69、瀬戸美濃系磁器碗54～65・67（57・67は肥前系？、59は関西系？）、小坏66（関西系？）、皿68（関西系？）、産地不明陶器蓋72・73、加工円盤74～78、土人形79、壺80、土瓶81、行平鍋82、大谷焼徳利83がある。

52・53は染付で、53は広東碗である。54～57は染付の端反である。58～65は染付の端反で、58は焼き継ぎ痕があり、高台内に「千七十」の透明釉の記号がある。59は胎土が瀬戸美濃系に類似するものの、文様の描写線が細く明瞭であり違和感があり関西系とも考えられる。

60～62は焼き継ぎ痕があり、60の高台内には「十三子」、61は「〆」、62は「七□□（欠損）」である。66は染付で器壁が極めて薄い。67は染付の端反である。68は染付で、碁笥底状を呈し底部無釉である。69は染付の端反蓋である。70は土師質の紅皿、71は色絵の端反碗である。

72は行平鍋の蓋で、灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉をかけ口縁端部は無釉、外面にカキ目を施す。73は土瓶の蓋で灰色の硬質胎土の外面に灰釉、白イッチン掛け、外面に３か所のハリ目跡がある。74は雲母片岩、75～78は瓦素材である。79は左右型合わせの馬のり猿像？で、底部に串穴がある。

80は灰色の硬質胎土の外面に灰釉、肩部から褐色釉をかけ流し、肩部４か所に粘土紐で飾耳を施す。81は橙色の軟質胎土で内外面に透明釉をかけ、「阿州光斉」の刻印がある。83は褐色の硬質胎土で鉄釉をかけ、肩部に「油　助（欠損）↑（欠損）」の刻印がある。

SK03出土遺物には、肥前系磁器碗84～89、猪口90、坏91～93、蓋94～98、皿99～104、餌入れ105、合子106、段重107・108、瀬戸美濃系磁器碗109～119、京信楽系碗120～126、蓋127・128、灯明皿129～133、灯明受皿134、鉢135、柄杓136、備前灯明皿137、灯明受皿138・139、関西系磁器碗140、蓋141、皿142、大谷焼蓋143、瓶144、水注146、産地不明磁器瓶145、陶器碗147、蓋148～152、鉢153、皿154、土瓶160、戸車155、焙烙156、泥面子157・158、土人形159、堺明石系擂鉢161がある。

84～89は染付で、86は口縁部内面に屈輪文、焼き継ぎ痕があり高台内に「〆」の透明釉の記号がある。87は体部外面に蛸唐草文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に松竹梅文である。89は高台内に「太明年製」銘がある。90は染付、91は白磁である。92・93は染付である。

94～98は染付で、95は端反蓋で体部外面に蛸唐草文、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内松竹梅文で高台内に「成化年製」銘で文様構成から碗87とセットと考えられる。96は口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内松竹梅文で高台内に「成化年製」銘である。97は高台径の広い高台である。98口縁部内面に四方襷文で「ハ」字状高台である。

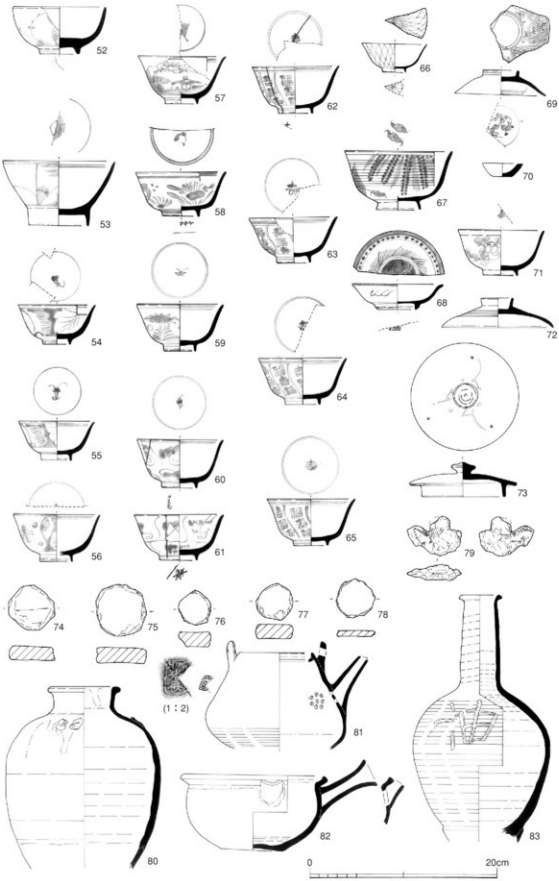


図7　土壙 SK02出土遺物

99～104は染付で、100～102は蛇の目凹形高台で見込みに３か所の目跡、高台内に重ね焼きの痕跡、見込みの文様構成が同じであることからセットものである。103は見込みは二重圏線内コンニャク印判の五弁花文、高台内渦福である。104は断面三角形の低高台で無釉、高台内に３か所の目跡がある。

105は白磁で底部外面無釉、リング状の摘みがある。106は染付で碁笥底の畳付無釉で、見込み中央は円形無釉である。109～119は染付の端反である。

120～126は灰白色の硬質胎土のしめなわ文碗で、120は内外面に灰釉、外面は赤色の海老・ナワ・ユズリハ、緑色のワラの上絵を施す。121は内外面に灰釉、外面は赤色のナワ・葉柄・中軸・緑色のウラジロの上絵を施す。122は内外面に灰釉、赤色の海老の上絵を施す。123・124は鉄絵である。125・126は内外面に灰釉、高台無釉で、赤色の海老・ナワ・葉柄・中軸、緑色のワラ・ウラジロ、黄色のユズリハであるが、125のウラジロは変色・消色している。

127・128は土瓶の蓋で、127は灰白色の硬質胎土の外面に灰釉、内面無釉である。128は黄白色の硬質胎土の外面に白土に赤・緑・青の三彩文で内面無釉である。

129～134は灰白色の硬質胎土で、129は内面に灰釉、外面無釉、見込みに２か所のハリ目跡、口縁部に灯芯油痕がある。130は内面に灰釉と３条沈線、外面無釉、口縁部に灯芯油痕がある。131は内面に灰釉、３条沈線と１か所のハリ目跡、口縁部に灯芯油痕がある。132は内面に灰釉と３条沈線、外面無釉、口縁部に灯芯油痕がある。133は内面に灰釉と４条沈線、外面無釉、口縁部内外面に灯芯油痕があり敲打により口縁端部が潰れている。134は内面に灰釉をかけ、仕切りに凹状の切り込みを入れる。135は内外面に灰釉をかけ、玉縁状口縁で口縁部直下に注口を付け、高台無釉、見込みに３か所のハリ目跡、畳付に５か所の目跡がある。

136は灰色の硬質胎土で内外面に灰釉、口縁部直下に柄を取り付ける把手を貼り付ける。体部内面に鉄絵の一条圏線、高台無釉で高台内に墨書があるが判読できない。137～139は褐色の硬質胎土である。

140は染付の端反で、全体に青みを帯びる。141は染付で焼き継ぎ痕があり、高台内に「〆」の透明釉の記号、全体に青みをおびる。142は輪花型押成形の青磁で釉が厚く内面に陰刻、高台は八角形の畳付無釉である。

143は茶褐色の硬質胎土の外面に鉄釉、内面無釉である。144は褐色の硬質胎土の外面に鉄釉、底部無釉である。145は外面に青緑釉、畳付無釉である。146は褐色の硬質胎土に鉄釉、底部外面無釉である。147は黄土色の硬質胎土に灰釉、外面に鉄絵、高台内無釉である。148～152は土瓶蓋で、148は黄土色の硬質胎土に鉄釉、内面無釉、149・150は灰黄色の硬質胎土の外面に灰釉、外面は白イッチン、巴形のケズリ痕のある宝珠形の摘みである。151は橙灰色の硬質胎土の外面に灰釉、白イッチン、152は灰色の硬質胎土の外面に灰釉、白泥と鉄絵、いずれも巴形のケズリ痕のある宝珠形の摘みである。

154は灰色の硬質胎土で無釉、内面に陽刻の獅子？を施す。153は褐色の硬質胎土で内外面に灰釉をかけ鉄釉を散らす。156は土師質の焙烙で口縁部が直立する。157・158は型押成形、159は左右型合わせの馬像である。

160は灰色の硬質胎土に灰釉、底部外面と口縁部～体部外面上位は無釉、外面には白泥と鉄絵、底部外面には煤が付着している。161は口縁部のナデにより擂目は消し揃えられる。見込みの擂目は放射状文様である。

図 8　土壙 SK03出土遺物

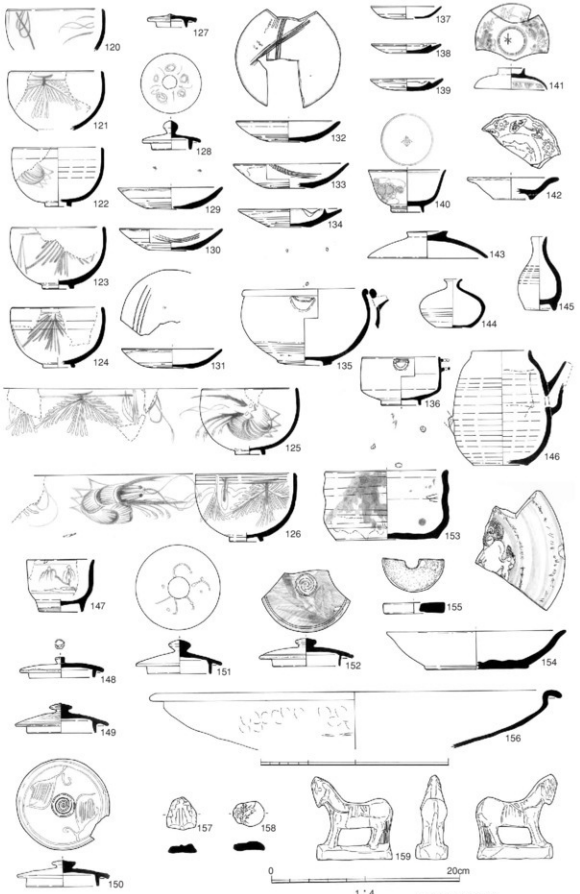


図９　土壙 SK03出土遺物

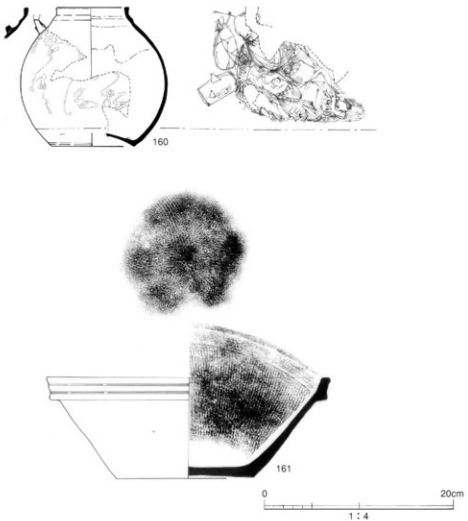


図10　土壙 SK03出土遺物

(3)　落込 SX01（図４・11、図版16）

調査地Ⅰ区において屋敷地の表側で行われた初期の島状整地による高まりの周囲に生じた落込で高低差は40cmを測る。広い敷地を有する徳島藩士の屋敷内において初期造成で行われる島状整地は、屋敷地の表に屋敷宅を構えるにあたり土木工法としては簡略的ではあるが有効的な方法である。屋敷地内において土地利用の拡大の必要性が生じた段階、もしくは島状整地後に連続して島状整地の周囲の落込に土砂が運び込まれ（第８層）、屋敷地のほぼ全域は平坦化すると考えられる。

出土遺物には、焼塩壺162、土師質皿163があり、島状整地の周辺部の落込へ整地を行う際に混在したものと考えられる（第８層出土）。

162は底部と輪積成形の体部を接合するもので、器壁は厚く口縁部の屈曲は不明瞭で、表面の磨滅が著しい。163の底部外面は回転糸切り痕と簀の子状圧痕である。

(4)　土壙 SK04（図４・11・12、図版16・17）

調査地Ⅰ区においてSK01と新旧の切り合い関係を示し、平面形が一辺３ｍ、深さ25cmを測る平

面形が方形を呈する土壙である。形状からは方形の廃棄土壙の可能性も考えられるが、陶磁器類を含めた出土遺物は極めて少量である。

出土遺物には、肥前系磁器皿164、土師質皿165・166、下駄172～175、栓176、碁石177がある。

164は染付で、口縁部に敲打による剥離痕がある。165の底部外面は回転糸切り痕と簀の子状圧痕、166の底部外面は回転糸切り痕、口縁部に灯芯油痕である。

172は丸型の連歯下駄で前壺は台の中央で棕櫚紐が付いている。横緒孔は後歯前方の台端、前歯底に２か所、後歯に２か所の釘穴がある。173は角型の陰卯下駄で前壺と横緒孔を通した棕櫚紐が残る。前壺は台の中央、横緒孔は後歯前方の台の端にある。174は角型の刳り下駄、175は角型の草履下駄である。

(5) 土壙 SK05（図４・11・12、図版16・17）

調査地Ⅰ区の島状整地上において検出した平面形が長径２ｍ、短径60㎝の収束する溝状を呈し、深さ20㎝を測る。

出土遺物には、産地不明陶器碗167、瀬戸美濃系陶器皿168、瓦質火鉢169、陶器人形170、土人形171、碁石178がある。

167は橙灰色硬質胎土の内外面に灰釉、畳付無釉、外面に白泥の「福」字、内面と白泥の刷毛文

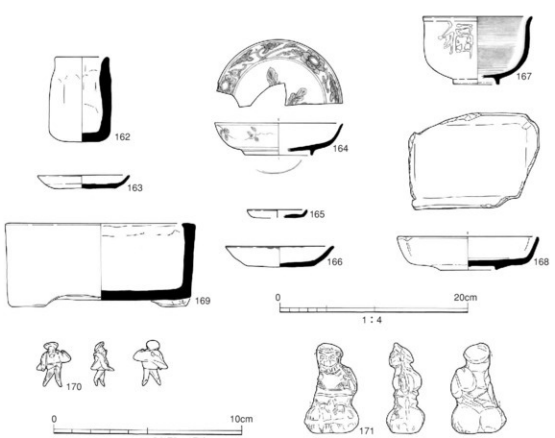


図11　落込 SX01（162・163）、土壙 SK04（164～166）、SK05（167～171）出土遺物

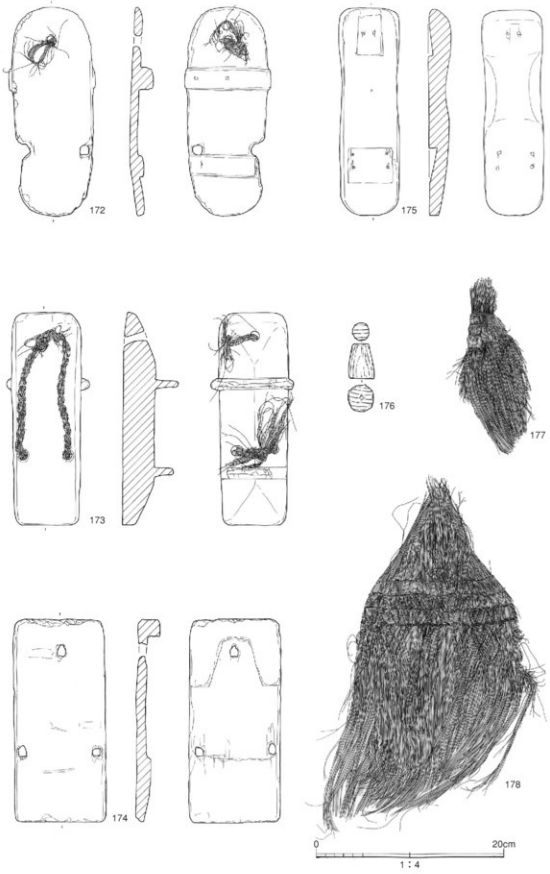


図12　土壙 SK04・05出土遺物

である。168は型打成形の方形皿で、灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉、底部は碁笥底状の無釉、口縁部の四隅は輪花成形である。169は粘土板成形の方形火鉢で内外面は磨滅している。170は人物像、上絵を施す。171は前後型合わせの大黒である。

(6) 土壙 SK06（図３・13・14、図版17～19）

調査地Ⅱ区において検出した土壙で、調査地外へ広がり規模については不明である。

出土遺物には、肥前系磁器坏179～181、碗182～186、蓋187、紅皿188・189、香炉190、瀬戸美濃系磁器碗191・192、蓋193・194、京信楽系碗195、蓋物196、灯明受皿197～199、産地不明陶器鉢200、ミニチュア鍋201、瀬戸美濃陶器鉢202、備前灯明受皿203～207、土師質灯明皿208・209、産地不明陶器蓋210・211、擂鉢212、鉢213、蓋214・215、焙烙216、土瓶217・218、加工円盤219～225、土人形226、下駄227～231、曲物232・233、傘234がある。

179～181は染付、182は染付で二重網目文である。183は白磁、184は染付、185は染付の端反で焼き継ぎ痕があり、高台内「－」の透明釉の記号である。186は染付で、口錆、畳付無釉、焼き継ぎ痕があり高台内に透明釉書きがあるが判読できない。

187は染付で口縁部無釉、天井に橋渡しの摘みを貼り付ける。188・189は白磁の型押成形で外面に貝の放射状脈を表現する。190は底部外面と内面無釉で見込みに墨書がある。

191～193は染付の端反で、192は焼き継ぎ痕がある。194は染付の端反で、全体に青みをおびる。

195は灰白色の硬質胎土にしめなわ文を鉄絵で施し灰釉をかけ、高台無釉である。190は灰色の硬質胎土の内面に灰釉、口縁端面と底部外面は無釉である。

197は灰白色の硬質胎土の内面に灰釉、外面無釉で重ね焼きの痕跡がある。198・199は灰色の硬質胎土で内面灰釉、外面無釉で、199は重ね焼きの痕跡がある。

200は輪花型押成形で灰色の硬質胎土の内外面に鉄釉をかけ、三足を貼り付け、口縁部から逆三角形の切り込みを入れる。201は灰色の硬質胎土に鉄釉、底部無釉で三足を貼り付け、見込みにハリ目跡がある。202は灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉、高台無釉、体部外面に２条の圏線を施す。

203～207は内面の仕切りの三方に切り込みを入れ、207は口縁部に灯芯油痕がある。208・209は底部外面回転糸切り痕である。

210は土瓶の蓋で、灰色の硬質胎土の外面に灰釉、白イッチン掛けし巴形のケズリ痕のある宝珠形の摘みである。211は行平鍋の蓋で、灰色の硬質胎土の内外面に灰釉、外面にカキ目、口縁端部は無釉である。

212は褐色の硬質胎土の口縁部～外面に白泥、高台と内面は無釉、口縁部にナデが施されるが擂目は完全に消し揃えられない。213は輪花型押成形の方形口縁で、灰白色硬質胎土の内外面に白泥、畳付無釉、方形高台である。

214は土瓶の蓋で、灰色の硬質胎土の内面に鉄釉、215は橙色の軟質胎土の内面に灰釉である。216は土師質で底部から口縁部が短く直立する。

217は褐色の硬質胎土の内外面に鉄釉、底部と口縁部の蓋受け部は無釉である。218は橙色の軟質

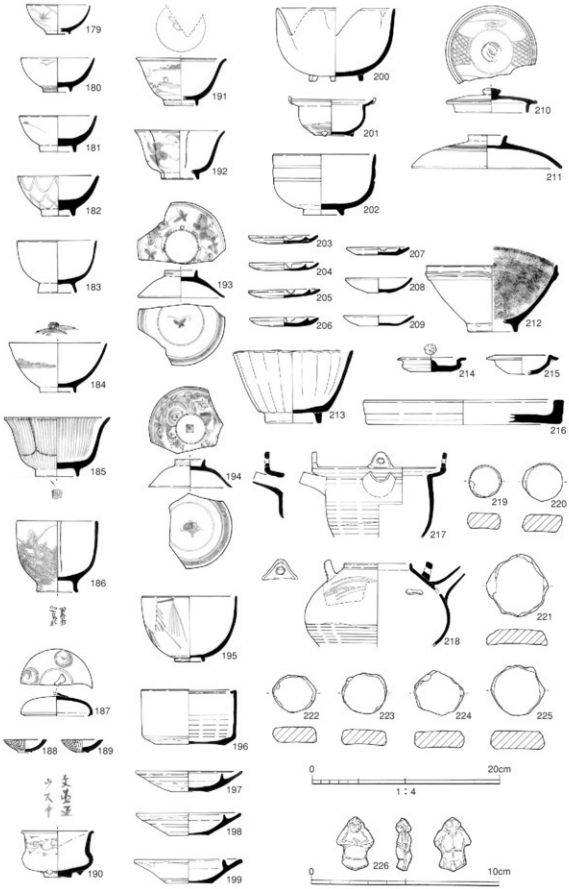


図13　土壙 SK06出土遺物

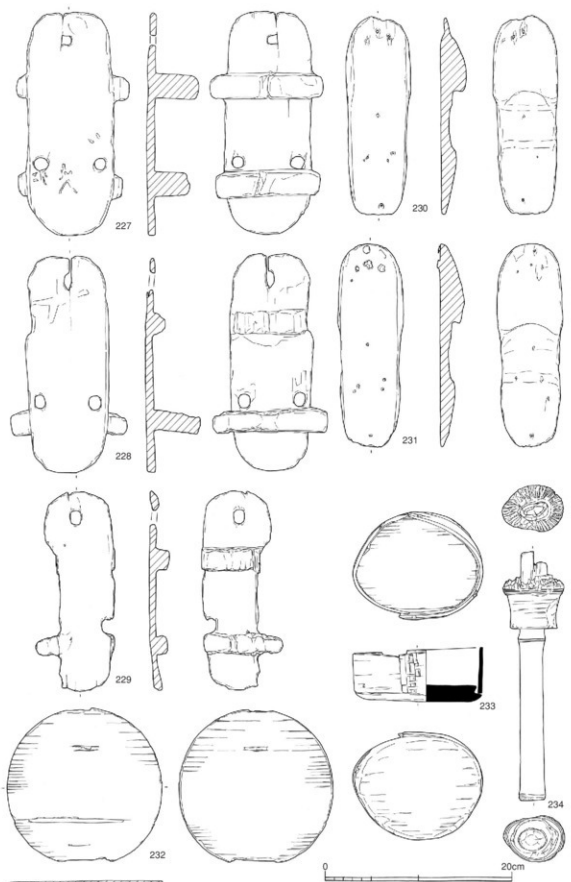


図14　土壙 SK06出土遺物

胎土の外面に褐色釉、外面に白イッチン掛け、底部外面には煤が付着している。

219～225は瓦素材、226は前後型合わせの人物像である。227～229は丸型の連歯下駄で前壺は台の中央、横緒孔は後歯前方の台端にある。230・231は角型の草履下駄である。232は曲物の底板、233は側面で板留めを施した容器である。234は和傘の頭ロクロ部と柄である。

5　小結

徳島城下町跡における武家屋敷において、城下町建設の初期段階の屋敷整地に島状整地を施す土木工法はすでに城下町跡・前川の徳島藩士の福屋家においても確認されている[1]。また、前川の林弥五右衛門鉄砲組屋敷においても確認されている[2]ことから、武士の身分秩序に関わらず武家屋敷の整地法としては通例的な工法として理解できる。今回の屋敷地における島状整地の範囲は屋敷地全体の概ね30％程度と推測され、後に、島状の高まりの周囲の低位部へ土砂を投入することにより屋敷地のほぼ全域が平坦化する。この平坦化が島状整地後、時間差をおかずに行われるものなのか、あるいはある段階まで放置されるものなのか、また、平坦化を行う必要性は何かなどの問題がある。

今回の調査では島状の高まりの周囲を埋める整地土から17世紀後半と考えられる焼塩壺が出土していることから、18世紀代には均等な整地が進行し、屋敷内の土地利用空間の拡張に伴い、19世紀代には屋敷縁辺部において不用物資の廃棄（SK02・03）が行われたと考えられる。島状整地の確認は一部に留まり、島状整地上での遺構の時間的な位置付けは明確でないが、島状整地の周囲で検出される遺構（SK01～03・05）が19世紀代に限定されることから、屋敷地内における遺構の空間的・時間的な位置付けと整地行為との関連が示される好事例とされる。

このように、屋敷地内における建屋部の島状整地と島状の高まりの周囲で行われる整地行為は、屋敷の土地利用形態に関与するものとして捉えることができる。今後、武家屋敷における初期の整地法としての島状整地が、城下町跡・前川だけではなく他地域においても通常的に行われる整地法であるのか否かの事例の比較検討が必要である。

（註）
(1)　徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』17、2007年。
(2)　徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』19、2007年。

Ⅱ　徳島惣構跡

1　遺跡の立地と歴史的環境（図１・２）

天正13（1585）年、阿波国の領主となった蜂須賀家政は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。徳島城下町の特徴は、徳島城が築かれた標高61mを測る城山が位置する「徳島」を中心とした旧吉野川下流域のデルタ地帯の島状微高地を利用した島普請である。

徳島惣構跡は徳島城が築かれた「徳島」を指し、北は旧助任川、南は旧寺島川、東は旧福島川に囲まれ、西は西之丸に石垣を築き御花畠と界する。東は石垣と堀で城内と武家地を分ける。今回の調査地は、徳島城の東側の堀に隣接する地域で、徳島城建設とともに武家地として整備されている。

なお、徳島城築城以前には、元中２・至徳２（1385）年の細川頼之の消津城（消山城）が城山山上にあったとされ、天正10（1582）年、長宗我部元親の侵攻の経緯がある。ただ、蜂須賀入府以前の中世における城山周辺での考古学的な立場からの言及については、これまでなされていない。

城山山下にあたる徳島惣構跡の平成11（1999）年の調査は、蜂須賀入府以前の中世の遺構や遺物が初めて確認された事例である。旧吉野川下流域の低湿地帯でありながら、徳島城内～徳島惣構跡の一部に広がる城山南東部の小範囲の地域には、自然河川による良好なシルト層の堆積がみられる。自然が形成したこの地域では異例な好環境が中世の段階から活用されおり、徳島城や城下町の建設においても充分な礎であったことが考えられる。

調査地は福島橋と徳住橋の間の福島川（現在 助任川）右岸に位置し、元禄４（1691）年の「御山下画図」では、屋敷地の界線は記されていないが、樋口勝内（樋口家２代）、高田宇平六（高田家３代）の屋敷がある。享保年間（1716～1736）の「御山下絵図」でも樋口藤左衛門（樋口家３代）、高田宇平六（高田家３代）の名前が記されていることから、樋口家と高田家の屋敷が継続していることがわかる。

ところが、「蜂須賀家家臣成立書并系図共　樋口藤左衛門」では５代樋口卯源太は「明和６年７月28日屋敷替被御付赤川長之助元屋敷被下置候」、また「蜂須賀家家臣成立書并系図共　高田弓太」では、３代高田宇平六は「明和５年６月３日御用ニ付家屋敷被召上、為代於住吉嶋伏屋新左衛門上り屋敷被下置候」とあり、樋口・高田両家の屋敷替に関する記載が見られ、天明３（1783）～５（1785）年の「徳島絵図」では、樋口・高田屋敷に隣接していた三澤・太田屋敷をも含めた広大な敷地が徳島藩士河瀬佐渡の屋敷となる。

徳島藩士の河瀬家については「蜂須賀家家臣成立書并系図共　河瀬理右衛門」では、６代河瀬克忠は、宝暦４（1767）年に三澤彦兵衛（５代）と双方屋敷替、宝暦５（1768）年には高田宇平太の元屋敷を拝領している。さらに、宝暦６(1769)年には、滝勇蔵・森夫左衛門屋敷の一部を拝領している。

「阿淡年表秘録」では、河瀬克忠（改名：河瀬佐渡）は明和６（1769）年１月21日に若年寄御付高1300石の中老職となる。その背景には、10代藩主蜂須賀重喜による登用の経緯がある。しかし、明和６(1769)年の藩主重喜の隠居に伴い同人付けとなり小性組は没収され、さらに、天明８(1788)年には家屋敷が没収され、屋敷の長屋住まいとなる。寛政元(1789)年、山崎孝太郎上り屋敷の内、

建家ある分が与えられる。

安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図」徳島では、河瀬屋敷は縮小され、河瀬屋敷の北側には「徳嶋御屋敷」、西側には「御国在番御長屋」が置かれる。

2　調査に至る経緯と経過（図２～３）

今回の調査は、マンション建設工事に伴う事前の発掘調査である。調査地には一部に倒壊の危険性のある平屋造の河瀬家屋敷が存在していた。既存建物の解体除去後に試掘調査を実施し、遺跡の残存状況を確認している。上位は撹乱を受けているが、近世武家屋敷の整地層及び遺構検出面は良好に残存していたことから発掘調査についての協議を進めた。発掘調査は工事対象地の内、建物建設予定部（300㎡）を対象に実施した。

3　基本層序（図４、図版２）

調査地周辺の標高はT.P.＋1.4ｍを測る。現代盛土層および撹乱土層下に第１～13層が堆積する。以下、上位より概略する。

第０層：現代盛土および撹乱土層

第１層：層厚20㎝を測るにぶい黄色砂礫混じりシルトの整地土である。

第２層：層厚10㎝を測る灰白色シルトの整地土である。

第３層：層厚30㎝を測る黄灰色砂礫混じりシルトの整地土である。

第４層：層厚20㎝を測る灰黄色砂礫混じりシルトの整地土である。

第５層：層厚10～20㎝を測る灰黄色砂礫混じりシルトの整地土である。

第６層：層厚10㎝を測る灰色シルトの整地土である。

第７層：層厚10㎝を測る明緑灰色砂質シルトに浅黄色細砂の混在する整地土である。

第８層：層厚10㎝を測る灰色シルトと灰黄色シルトの混在する整地土である。

第９層：層厚20㎝を測る灰白色シルトと灰オリーブ色細砂の混在する整地土で、上位に黄橙色粘土質シルトが敷かれる。

第10層：層厚20㎝を測る灰黄色砂質シルトに灰白色シルトがブロック混在する整地土である。

第11層：層厚20㎝を測る灰黄色細砂～シルトの整地土である。

第12層：層厚40㎝を測るにぶい灰黄色粘土質シルトの整地土である。

第13層：上位は明オリーブ灰色砂質シルト～にぶい黄色砂質シルトで砂のラミナがみられる。下位（14層）では、明灰色シルト～細砂へ漸移的に変化する自然堆積土である。

第１～12層は屋敷内における整地土であり広範囲での連続堆積がみられないことから、屋敷内における整地は不均等に敷かれたか、もしくは均質でない土砂が使用されたと考えられる。調査地の北東隅部で確認した第12層の整地土は良質のシルトであり、整地形状から屋敷地の表側で初期段階に行われた島状整地に伴うものと考えられる。また、第13層は城山南東域で確認される自然河川による良好なシルトであるが、層厚が薄く土壌の還元作用が顕著である。また、調査地内においてシルト堆積の裾を確認していることから旧福島川右岸における自然堆積の傾斜部に該当すると考えられる。

図1　調査地の位置と周辺（S＝1：20,000）
（安政年間「御山下島分絵図」と現在の地形図）

図2　調査地位置図（S＝1：5,000）
（安政年間「御山下島分絵図」徳島と現在の地形図）

図3　調査地概略図（S＝1：1,000）
安政年間「御山下島分絵図」徳島の屋敷割と調査地）

4　調査概要

調査では基本層序の第13層上面において遺構・遺物を検出しているが、遺構の重複により旧遺構の検出が安易でない箇所については、部分的に第13層下面(任意面)において遺構・遺物検出を行った。また、井戸については激しい湧水のため人力掘削を途中で断念し、機械掘削で井戸底部の確認を試みたが、湧水による地盤崩壊が著しく最終的には良好な状況での検出には至っていない。

(1)　土壙 SK01（図４・５、図版９・10）

安政年間の河瀬屋敷に位置し井戸SE01の掘形を切り込み重複する平面形が長辺1.1m、短辺70cmの隅丸長方形を呈し、深さ30cmを測る小規模な土壙であるが、陶磁器類が充満した廃棄用の土壙である。

出土遺物には肥前系磁器碗１～３、坏４～８、皿18、蓋物23、瀬戸美濃系磁器碗９～17、皿19・20、蓋21、京信楽系蓋22、碗25～27、ミニチュア碗28、台付灯明受皿29、産地不明陶器鉢24、蓋30、瓶31、花生32、甕34、焙烙33がある。

１～３は染付で１は「ハ」字形高台、２は端反で焼き継ぎ痕があり高台内に「十」の記号、３は口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に松竹梅文である。

４～８は染付で畳付無釉、９～16は端反の染付、17は端反の色絵で口錆である。

18は染付で焼き継ぎ痕があり、蛇の目凹形高台である。

19は染付の輪花型打成形で内面に陽刻の文様、20は染付の型打成形の八角形口縁で、内面に陽刻の文様を施す。

21は色絵の口錆で、碗17と文様構成が同じであることからセットである。

22は合子の蓋で、灰黄色の硬質胎土の内外面に灰釉、口縁端部は無釉である。

23は染付で焼き継ぎ痕があり、口縁端部は無釉である。24は灰白色の硬質胎土の内外面に鉄絵後、灰釉をかけ高台無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎである。

25・26はしめなわ文碗で、25は灰白色の硬質胎土で鉄絵のしめなわ文、26は色絵のしめなわ文で赤色のナワ・葉柄、緑色のユズリハ・ワラ・ウラジロである。

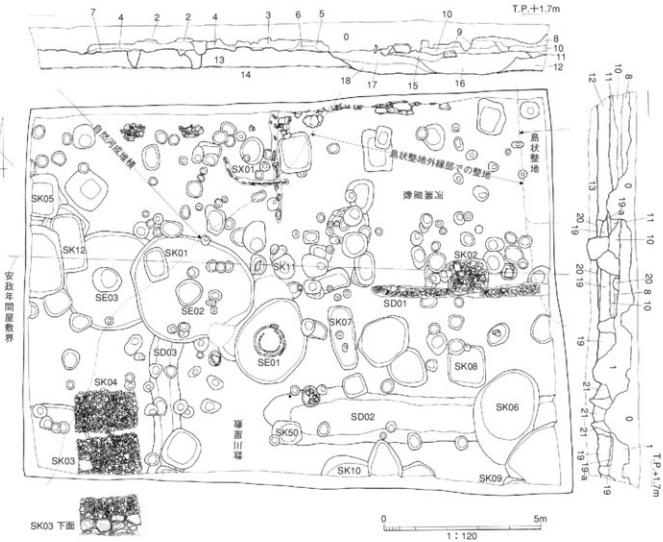
27は灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉、高台無釉で体部外面は亀甲型の型打成形である。28は灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉、高台無釉である。

29は灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉、底部外面無釉で、受皿の内面仕切りに凹状の切り込みを入れる。

30は行平鍋の蓋で、灰色の硬質胎土の外面に帯状の鉄釉、白イッチンに緑釉をかけトビガンナ装飾、口縁部は無釉である。31は橙色の硬質胎土で外面に褐色釉をかけ、内面無釉、外面にトビガンナ装飾とカキ目を施す。

32は黄土色の硬質胎土で外面に白色釉、口縁部から緑釉をかけ流し、蛇の目高台で畳付に白泥、６か所の目跡がある。

33は土師質で口縁部が屈曲する。34は灰色の硬質胎土の内外面に鉄釉、体部外面にカキ目を施し肩部から黒色釉をかけ流す。



第０層：現代盛土および撹乱土層
第１層：にぶい黄色砂礫混じりシルト（整地土）
第２層：灰白色シルト（整地土）
第３層：黄灰色砂礫混じりシルト（整地土）
第４層：灰黄色砂礫混じりシルト（整地土）
第５層：灰黄色砂礫混じりシルト（整地土）
第６層：灰色シルト（整地土）
第７層：明緑灰色砂質シルトに浅黄色細砂の混在（整地土）
第８層：灰色シルトと灰黄色シルトの混在（整地土）
第９層：灰白色シルトと灰オリーブ色細砂の混在（整地土）
第10層：灰黄色砂質シルトに灰白色シルトがブロック混在（整地土）
第11層：灰黄色細砂～シルト（整地土）
第12層：にぶい灰黄色粘土質シルト（整地土）
第13層：明オリーブ灰色砂質シルト～にぶい黄色砂質シルト
第14層：明灰色シルト～細砂
第15層：灰色細砂～シルト（島状整地の周縁凹地整地土）
第16層：灰色シルト～細砂～明オリーブ灰色粘土質シルトの混在島状整地の周縁凹地整地土）
第17層：にぶい黄色細砂に灰白色シルトと浅黄色粘土質シルトが混在島状整地の周縁凹地整地
第18層：灰色砂礫～黄褐色粘土質シルト島状整地の周縁凹地整地土）
第19層：オリーブ灰砂質シルト島状整地の周縁凹地整地土）
第19-a層：黄橙色シルト質粘土
第20層：灰色粘土質シルトに灰黄色砂礫が混在（島状整地の周縁凹地整地土）
第21層：灰白色砂質シルト（溝 SD02埋土）

図４　遺構配置図・断面土層図

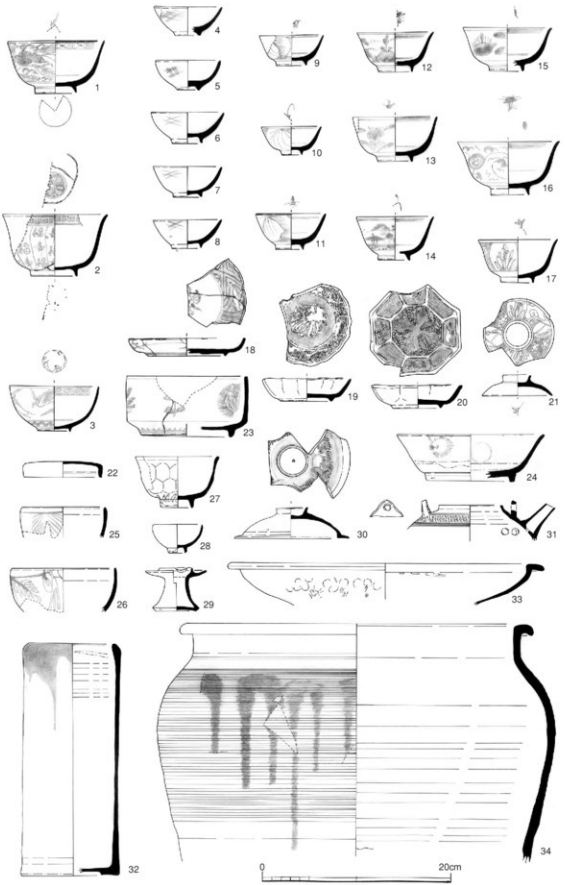


図5　土壙 SK01出土遺物

⑵ 土壙 SK02（図４・６～８、図版３・10～17）

安政年間の河瀬屋敷と数川屋敷の境界部に位置し、溝SD01を切り込む平面形が長辺1.3m、短辺1.1mの長方形を呈し、深さ35cmを測る土壙で、土壙下位に陶磁器類が集積する。

出土遺物には肥前系磁器碗35～45・51、蓋物46・53、小坏47～50、段重52、蓋54～58・77、皿59～66、御神酒徳利67・68、香炉103、瀬戸美濃系磁器碗69～75、蓋76・78、陶器皿79～82、植木鉢100、産地不明陶器皿83、擂鉢97、壺101、甕102・105、土製品98・99、備前灯明皿84・85、京信楽系碗86～90、鉢91、柄杓92～95、大谷焼瓶96、堺明石系擂鉢104がある。

35～37は染付の端反で、36は「ハ」字形高台である。38は染付で、口縁部内面に四方襷文である。39は「ハ」字形高台で、口縁部内面四方襷文、見込みは二重圏線内に松竹梅文、高台内に「天明年製」銘である。40・41は染付の広東碗である。

42～44は湯呑碗で、42は口縁部内面に四方襷文である。45は染付の筒形碗で、口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に手描きの五弁花文である。

46は染付で口縁端部無釉である。47～50は染付、51は高台内に二重圏線の陽印である。52・53は染付で、52は口縁端部は底部外面は無釉、53は碁笥底状で口縁部と高台は無釉である。

54～57は染付で、54は口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線＋文様で文様構成が碗38と同じでありセットと考えられる。55は口縁部内面に四方襷文、見込みは二重圏線内に松竹梅文、高台内に「天明年製」銘、文様構成が碗39と同じであることからセットと考えられる。57は高台内に「太明年製」銘である。

58は合子の蓋で、染付の口縁端部は無釉である。

59～66は染付で、59は輪花型打成形で見込みは松竹梅文、蛇の目凹形高台で高台内「成化年製」銘である。60～64は蛇の目凹形高台で、61～64は文様構成からセットものである。65は輪花型打成形、66は見込みに松竹梅文、高台内に「富貴長春」銘で、６か所のハリ目跡がある。

67・68は染付の鶴首形である。

69～74は端反の染付、75は染付の湯呑碗である。

76～78は染付で、78は碗74とセットと考えられる。

79～81は灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉、輪花型打成形で、80・81は見込みに３か所のハリ目跡である。82は馬目皿である。

83は灰褐色の硬質胎土で外面に灰釉と白泥、内面無釉である。

84・85は内面の仕切りに凹状の切り込みを入れる。

86は灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉である。

87はしめなわ文碗で、灰白色の硬質胎土の内外面に灰釉、高台無釉、赤色のナワ・葉柄、黄色のユズリハ、緑色のワラ・ウラジロである。88～90は灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉である。

91は黄灰色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉、内面に白イッチンと鉄絵、畳付に５か所の目跡である。

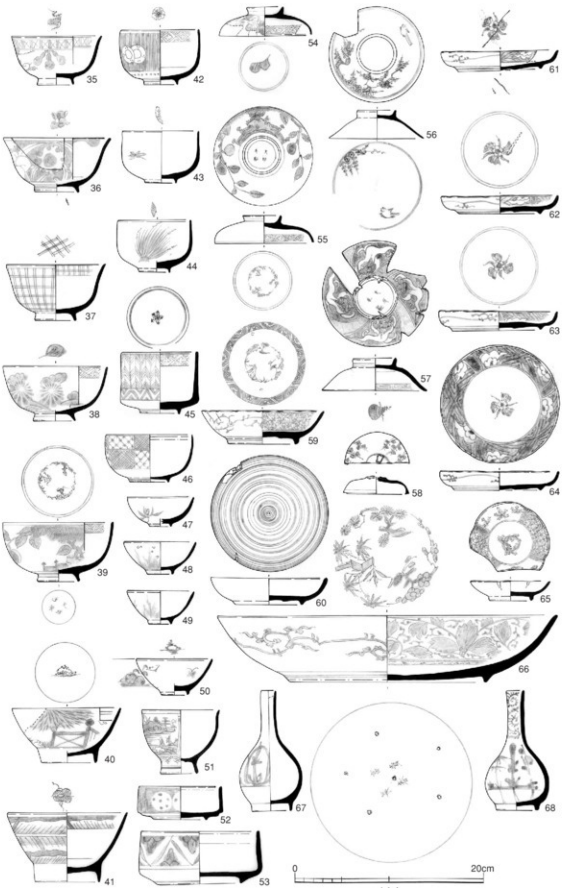


図 6　土壙 SK02出土遺物

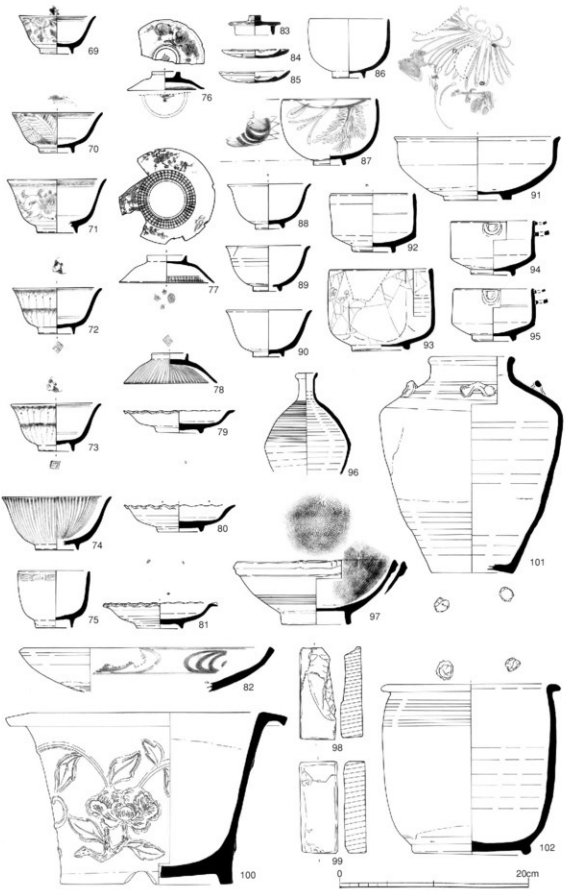


図7　土壙 SK02出土遺物

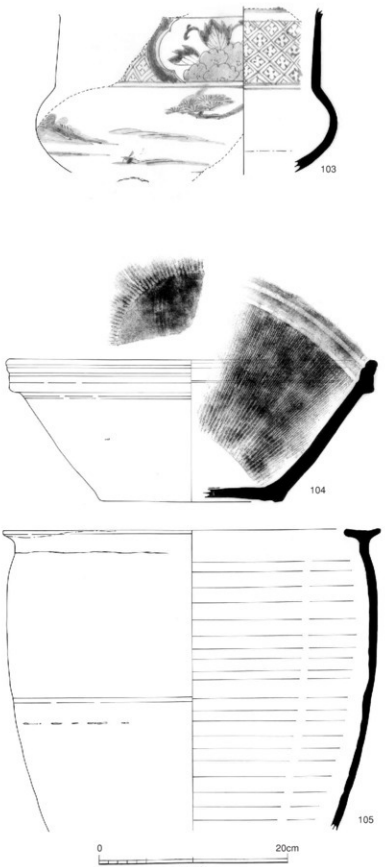


図 8　土壙 SK02出土遺物

92～95は灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉、内面に１条の鉄絵の圏線、蒲鉾形の中空の把手を貼り付け、上下に孔があいている。

93は黄灰色の硬質胎土で型打成形、外面は白泥に鉄絵後灰釉、内面無釉、高台内に白泥を塗る。96は褐色の硬質胎土で口縁部内面～外面に鉄釉、体部外面にカキ目を施す。97は褐色の硬質胎土で口縁部～外面に灰釉、高台無釉、外面にカキ目を施す。98・99は直方体の用途不明の土製品である。

100は黄白色の硬質胎土に灰釉、高台と内面無釉、高台内に重ね焼きの痕跡、外面に陽刻文様である。101は灰色の硬質胎土の外面に灰釉、底部外面と内面は無釉、102は灰白色の硬質胎土の内外面に鉄釉、高台無釉、体部外面にカキ目、見込みは４か所の胎土目跡である。103は染付で頸部内面に四方襷文、104は擂目の上端はナデで消し揃えられる。105は褐色の硬質胎土に鉄釉、口縁部は左右に拡張させ端面は平坦である。

⑶　土壙 SK03・04（図４・９、図版４・５・18）

安政年間では数川家屋敷の裏側に位置し、SK03・04は長辺２m、短辺1.3mの平面形が長方形を呈する瓦片を主体とする廃棄土壙で並存する。また、SK03下には長辺1.9m、短辺1.3mの平面形が長方形を呈する瓦片を主体とする廃棄土壙が重複し、廃棄上面に緑泥片岩のブロックが一列に並べられている。

SK03出土遺物には、肥前系磁器碗106～108、京信楽系灯明受皿109、加工円盤110～115、SK04出土遺物には、肥前系磁器碗116、産地不明陶器蓋117、加工円盤118・119がある。

106～108は染付で、107は「ハ」字形高台、108は広東碗である。

109は灰色の硬質胎土で内面に灰釉、外面無釉、体部外面に重ね焼き痕がある。110～114は瓦片を素材とし、115は目皿を打ち割る。

116は染付で見込みは一重圏線内「壽」字である。117は行平鍋蓋で、黄灰色の硬質胎土で外面に鉄釉、内面無釉である。118・119は瓦素材である。

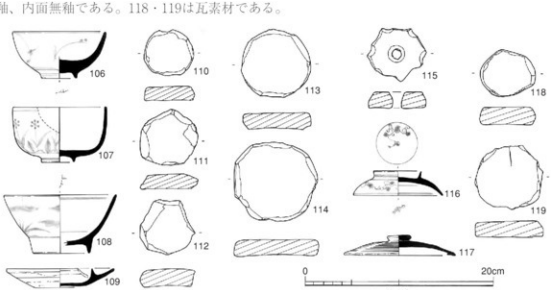


図９　土壙 SK03（106～115）、SK04（116～119）出土遺物

(4) **土壙 SK05**（図４・10、図版18）

調査地内で長辺1.4m、短辺90cmの平面形が隅丸長方形を呈し、深さ30cmを測る土壙である。

出土遺物には、肥前系磁器碗120、皿121、坏122、鉢123がある。

120は鉄釉後、外面に白泥の刷毛目文、内面は白泥の打ちかけ、121は染付、122は輪花型打成形の白磁、122は輪花型打成形の青磁である。

(5) **土壙 SK06**（図４・10、図版17～19）

長径３m、短径２mの平面形が長円形を呈し、深さ60cmを測る土壙である。

出土遺物には、肥前系陶器碗124・125、肥前系磁器皿126・131、土師質皿127・128、産地不明陶器火入れ129・130、瓦質土製品132がある。

124・125は灰白色の硬質胎土で内外面に灰釉、126は内外面に緑釉、見込み蛇の目釉剥ぎで重ね焼きの痕跡がある。127・128は口縁部に灯芯油痕がある。

129は黄灰色の硬質胎土で、体部上位～口縁部内面に青緑釉、130は黄灰色の硬質胎土で体部外面に鉄絵、外面～口縁部に灰釉、内面無釉である。131は青磁で折縁形口縁、鉄錆を塗布した蛇の目凹形高台で底部外面は蛇の目釉剥ぎ、重ね焼き痕、獣面の三足を貼り付ける。132は竈の附属品である。

(6) **土壙 SK07**（図４・10、図版19）

長辺２m、短辺75cmの平面形が長方形を呈し、深さ５cmを測る土壙である。

出土遺物には、肥前系磁器皿133・140、京信楽系皿134、備前灯明受皿135・136、土師質皿137、産地不明陶器蓋138・灯明台139、泥面子141がある。

133は染付で型押成形、134は灰色の硬質胎土で内外面に灰釉、高台無釉、見込みは３か所のハリ目跡がある。135・136は口縁部に灯芯油痕がある。

138は土瓶蓋で橙色の硬質胎土で外面に褐釉、内面無釉である。139は灰黄色の硬質胎土で外面鉄釉、底部外面無釉、140は染付で蛇の目凹形高台、141は型押成形である。

(7) **土壙 SK08～12**（図４・10、図版19・20）

SK08は一辺1.1mの平面形が方形を呈し、深さ30cmを測る土壙である。出土遺物には、肥前系磁器皿142、産地不明陶器碗143がある。142は染付で蛇の目高台、143は白色の硬質胎土で内面～外面に灰釉である。

SK09・10は調査地外へ広がる土壙である。SK09出土遺物には土人形144がある。144は前後型合わせで底部に串穴がある。SK10出土遺物には箱庭道具145がある。145は型押成形で底部に棒穴がある。

SK11は径75cmの円形を呈し深さ20cmを測る。出土遺物には、肥前系磁器皿がある。146は青磁で見込みに陰刻文様を施す。

SK12は長辺1.8m、短辺80cmの平面形が長方形を呈し、深さ40cmを測る。出土遺物には、堺明石系擂鉢147がある。147は擂目上端はナデで消し揃え、見込みには放射状文様である。

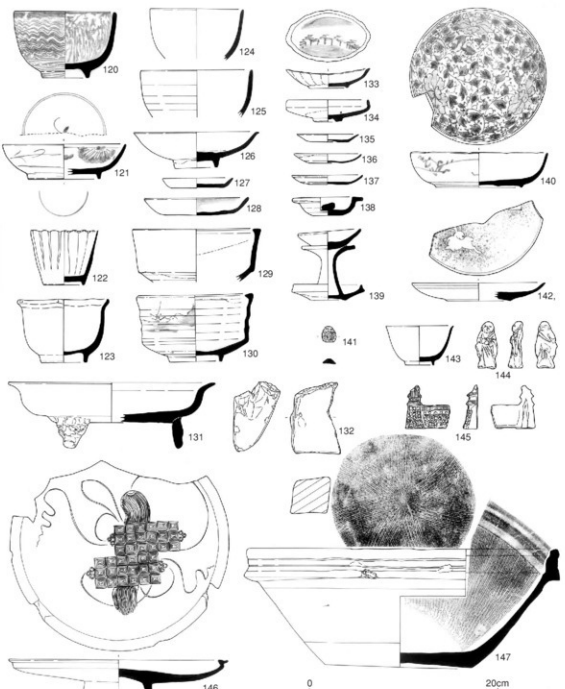


図10　土壙 SK05（120～123）、SK06（124～132）、SK07（133～141）、SK08（142・143）、SK09（144）SK10（145）、SK11（146）、SK12（147）出土遺物

(8) 土壙 SK13（図４・11、図版21～23）

長径１m、短径80㎝の平面形が長円形を呈し、深さ40㎝を測る土壙である。

出土遺物には瓦質土管148～152がある。148～152は外面はヘラミガキで接続用の突起部をもつ。149は内面に煤が付着し体部三方に切り込み窓があり火入れの可能性がある。

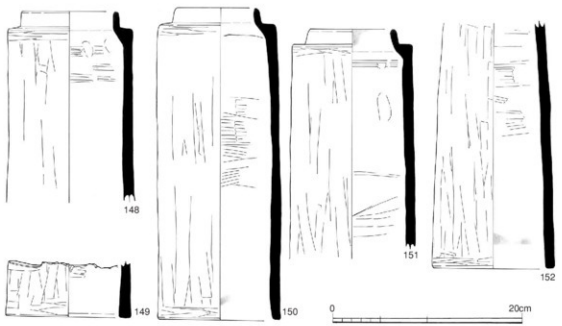


図11　土壙 SK13出土遺物

(9) 溝 SD01～03（図４・12、図版６・23）

SD01は長さ5.4m、幅35㎝を測る東西方向の収束する溝に瓦片を詰め込んだ溝で、安政年間の河瀬と数川家の屋敷界付近に位置することから、屋敷界を指標する溝と考えられる。

SD02は長さ10m、幅１～1.8m、深さ50㎝を測る東西方向の収束する素掘溝である。屋敷界を指標するSD01から若干南にずれて位置する。

出土遺物には、肥前系陶器碗153、皿155、肥前系磁器皿154、瀬戸美濃系陶器皿156、土師質皿157～161がある。

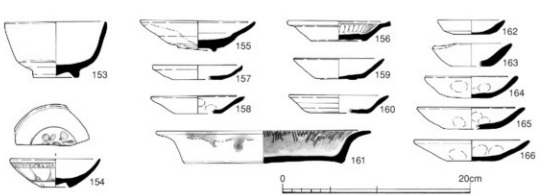


図12　溝 SD02（153～161）、SD03（162～166）出土遺物

153は灰色の硬質胎土に灰釉、高台無釉で高台内に円錐状のケズリ痕がある。154は染付の碁笥底で底部外面無釉である。

155は折縁皿で、体部外面～内面に灰釉、高台無釉、見込みに胎土目跡がある。

156は灰黄色の硬質胎土で内外面に灰釉、内面に鎬の除刻、見込みは蛇の目釉剥ぎで重ね焼き痕、高台内に粘土紐の重ね焼き輪状痕がある。157・158の底部外面は回転糸切り痕である。

SD03は幅90cm～１m、深さ25cmを測る南北方向の溝であるが、調査地内で途切れ連続性がみられないので収束溝の可能性が考えられる。

出土遺物には、土師質皿162～166がある。162の底部外面は回転糸切り後、手持ちヘラケズリである。

⑽　井戸 SE01～03（図４、図版８）

安政年間の河瀬家と数川家の屋敷界付近に位置し、井戸SE01の掘形は長径2.8m、短径２mの平面形が楕円形を呈する。井戸側は当初桶積上げであるが、後世に陶器管→石製へ２度の改修が行われている。井戸側から現代の生活用品が出土している。

SE02の掘形は長径４m、短径3.2mの長円形を呈し、径80cmの井戸側、SE03の掘形は径3.2mの平面形が円形を呈し、井戸側の長径90cm、短径80cmの平面形が長円形を呈する。SE02と03は新旧関係がある。

調査最終時に重機掘削によりSE01・03については井戸側の桶積みを確認しているが、SE02は井戸側施設は確認されず、再利用のために抜き取られた可能性がある。

5　小結

調査では徳島藩士の屋敷において17～19世紀代に至る遺構・遺物を確認し、これまで徳島城下町跡の調査で課題とされた屋敷界溝、屋敷の整地法、当該地における中世遺跡の広がりの諸問題に対して新たな情報を得ている。

まず、屋敷界溝であるが、SD01は小規模な溝に瓦片を詰め込んだ19世紀代の河瀬家と数川家の屋敷界溝と考えられる。SD01は収束溝であり屋敷界を周回する形態ではなく、また、屋敷界に井戸SE01～03が位置することからも、この場所における屋敷区画の意識は明瞭でない。また、19世紀代に通例的な２条の屋敷界溝の痕跡はみられない。

また、SD01の４m南で並行して位置するSD02は17世紀代の収束溝である。溝の位置及び形態から屋敷界溝と考えられるが、SD01と同様に収束し連続性がみられないことから、当初からこの場における屋敷地の区画は明確でなかった可能性がある。

次に、屋敷の整地法であるが、調査地の北東隅部では整地土の使い分けに特徴がある。この整地土の使い分けには、屋敷地を整地する以前の自然堆積である第13層の堆積状況が関与している。

自然堆積層（第13層）の堆積は調査地の西側でみられ、旧福島川に対して低傾斜し調査地内で堆積が途切れている。すなわち、屋敷表にはこの良質なシルトの堆積がみられず、軟弱な地盤上に屋

敷を構えなければならない。この問題を解消するために講じられたのが、調査地の北東隅で確認された第12層であり、屋敷表で良質なシルトを使用した島状整地である。島状整地（第12層）が施されることにより自然堆積層（第13層）の間隙部には凹地が生ずるが、この部分の整地には地盤強度をあまり考慮しない土砂が使用される。自然堆積（第13層）部は屋敷地盤として改良の必要性はないため、この３種類の異なる土砂を基盤に、以降、屋敷地内で整地が繰り返される。

この島状整地及びその周囲の凹地の整地時における土砂の使い分けは、すでに徳島城下町跡・前川において知られている工法である[1][2]。今回、徳島惣構跡でも初見事例として確認されたことから、軟弱地盤上に屋敷を構える際、特に屋敷表における島状整地のあり方は、徳島城下町では普遍的な整地法となり得る可能性が大きい。

最後に、中世遺跡の広がりについてであるが、現在、徳島城下町跡における調査の焦点の一つとして蜂須賀家の阿波入国前後の状況を知る資料の確認が求められている。今回の調査では、SD03出土遺物の土師質皿は17世紀以降の土師質皿とは形態・手法が異なる唯一の該当資料である。

吉野川下流域のデルタ地帯に立地する徳島城下町跡において、前代の中世遺跡を確認するための最低条件として、良質なシルトの堆積の有無が前提とされる。すなわち、徳島城下町が建設される以前に前身遺跡（中世遺跡）が立地するような好条件を備えた環境であったか否かである。現在、この良質なシルト層の堆積が想定される範囲は、旧福島川と旧寺島川に挟まれ、徳島城が位置する城山から砂州状に延びる非常に狭い領域であるが、少なくともこの領域には蜂須賀家の阿波入国前後と考えられる遺構・遺物がみられる。今回の調査地はこの領域に含まれるものであり、数少ない中世遺跡の広がりの確認例である。

（註）
⑴　徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』17、2007年。
⑵　徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』19、2009年。

写　真　図　版

調査地Ⅰ区（後方に城山を望む）　（北西から）

調査地Ⅰ区全景　（北から）

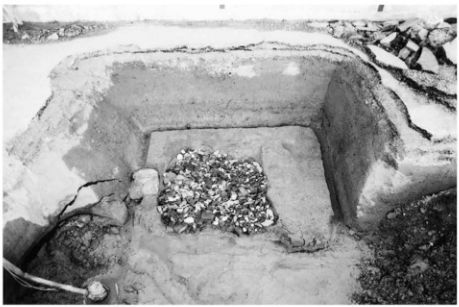
調査地Ⅰ区東壁断面　（北西から）

調査地Ⅱ区全景　（北から）

土壙 SK01　（北から）

土壙 SK01　（北東から）

土壙SK01・東壁断面一部
（西から）

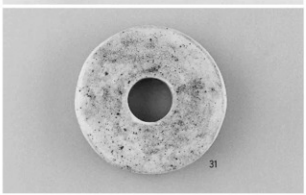


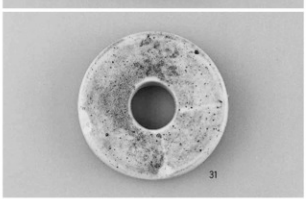
土壙 SK02・03
遺物検出状況　（西から）

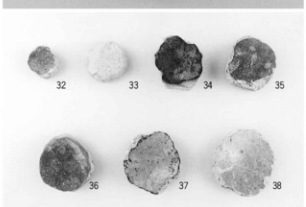
土壙 SK02・03
遺物検出状況　（西から）

土壙 SK02・03
遺物検出状況　（東から）

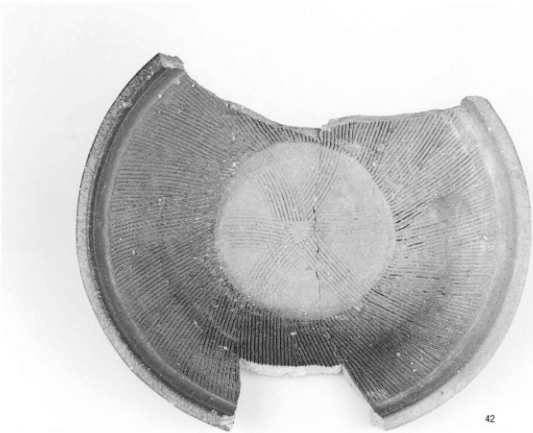
土壙 SK01出土遺物





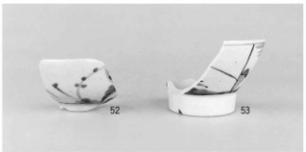


土壙 SK01出土遺物



土壙 SK01出土遺物

土壙 SK01出土遺物


52
53

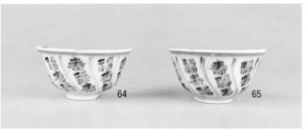
54
55

56
57

58
59

60
61

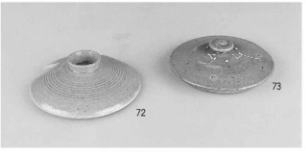
62
63

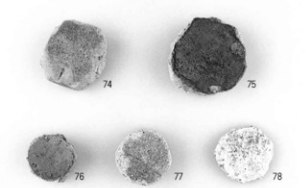

64
65

66
67

68
69

70
71


72
73


74
75
76
77
78

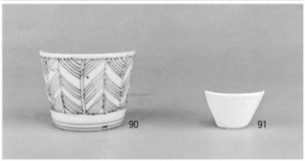
土壙 SK02出土遺物

土壙 SK02出土遺物

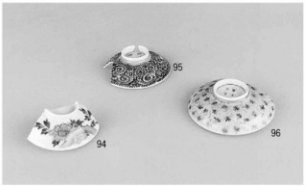
84
85

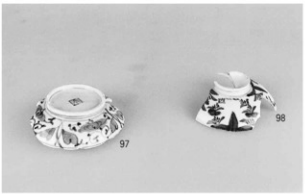
86
87

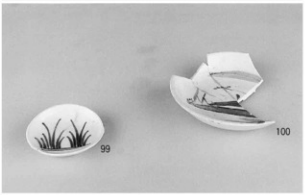
88
89

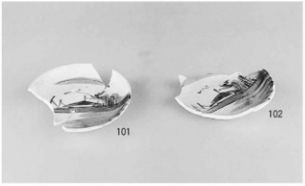

90
91

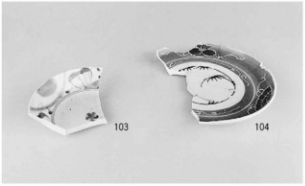
92
93

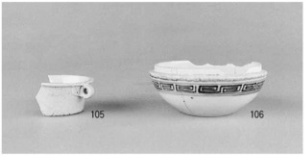

94
95
96


97
98


99
100


101
102

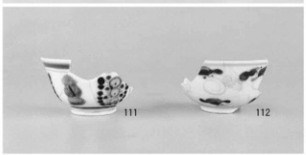

103
104


105
106

土壙 SK03出土遺物

107
108

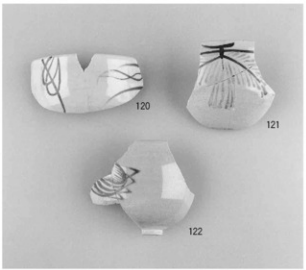
109
110


111
112

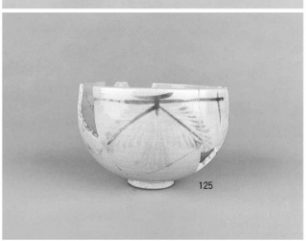
113
114

115
116

117
118
119


120
121
122

123
124

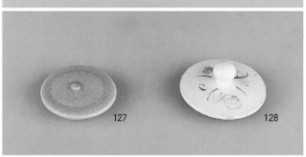

125

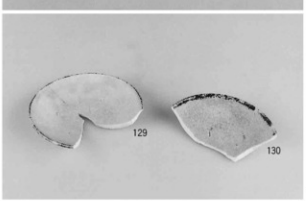
125

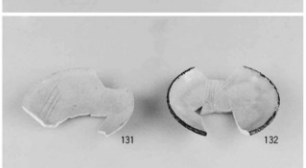
土壙 SK03出土遺物

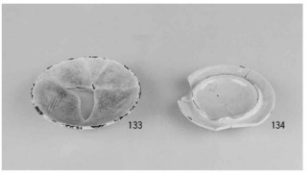
126

126

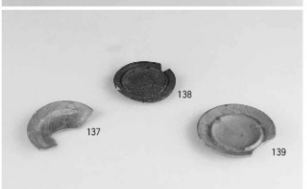

127
128

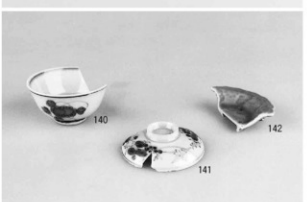

129
130

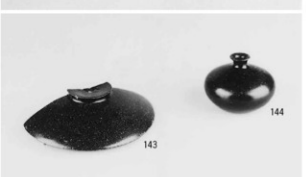

131
132


133
134

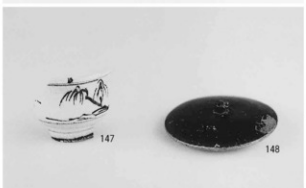
136
135

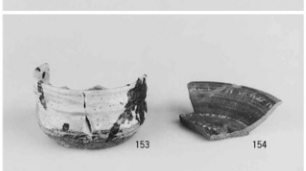

138
137
139

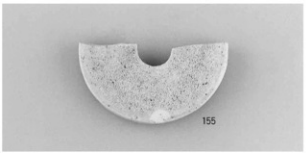

140
142
141

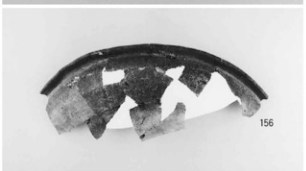

144
143

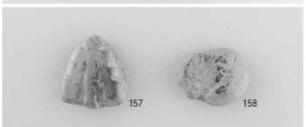
土壙 SK03出土遺物

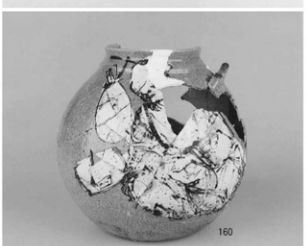






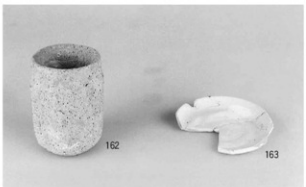


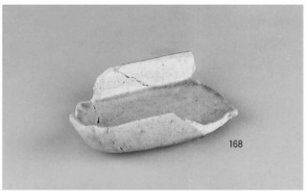


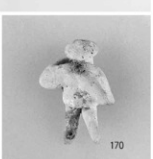


土壙 SK03出土遺物

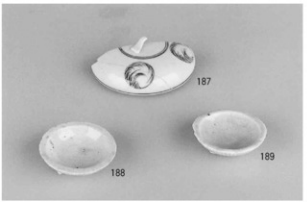
土壙 SK03出土遺物

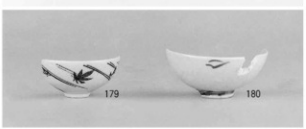


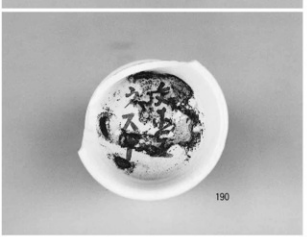


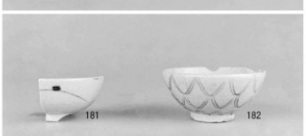


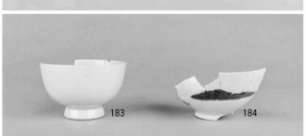
落込 SX01（162・163）、土壙 SK04（164～166、172～175）、SK05（167～171）出土遺物



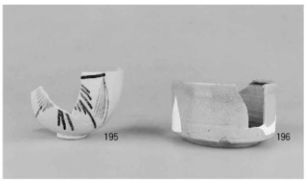


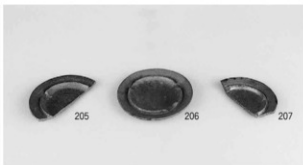


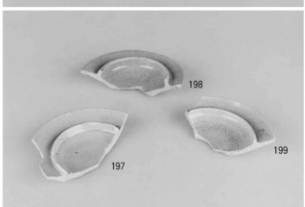


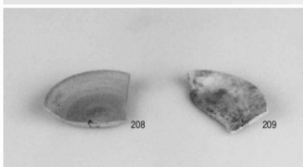


土壙 SK04（176・177）、SK05（178）、SK06（179～194）出土遺物

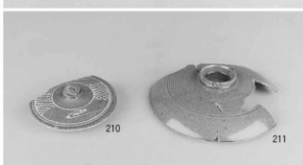

195
196

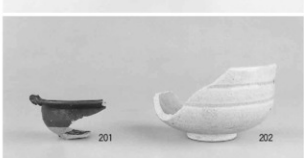

205
206
207


198
197
199


208
209

200


210
211


201
202

212
213

203
204

216
214
215

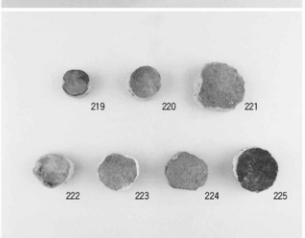
土壙 SK06出土遺物

217

227
228

218

229
230
231


219
220
221
222
223
224
225

232
233

226

226

234

土壙 SK06出土遺物

調査地全景（後方に城山を望む）　（南東から）

調査地全景（後方に徳島城惣構の土手と松並木）　（西から）

北壁断面堆積状況　（南から）

北壁断面堆積状況　（南西から）

土壙 SK02遺物検出状況
（南から）

土壙 SK02遺物検出状況
（東から）

瓦立遺構 SK01
（北西から）

土壙 SK03・04
遺物検出状況　（北から）

土壙 SK03・04
遺物検出状況　（北から）

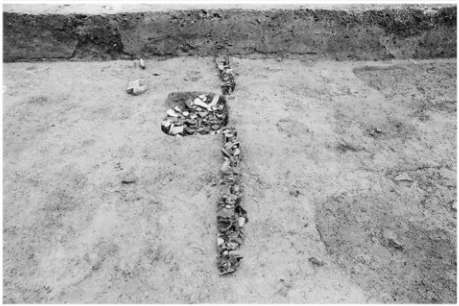
土壙 SK03・04
遺物検出状況　（西から）

土壙 SK03下面遺構
（北から）

土壙 SK03下面遺構
（西から）

土壙 SK03下面遺構
（南から）

溝 SD01遺物検出状況
（西から）



溝 SD01遺物検出状況
（西から）

溝 SD01遺物検出状況
（南から）

土壙 SK06　（南西から）

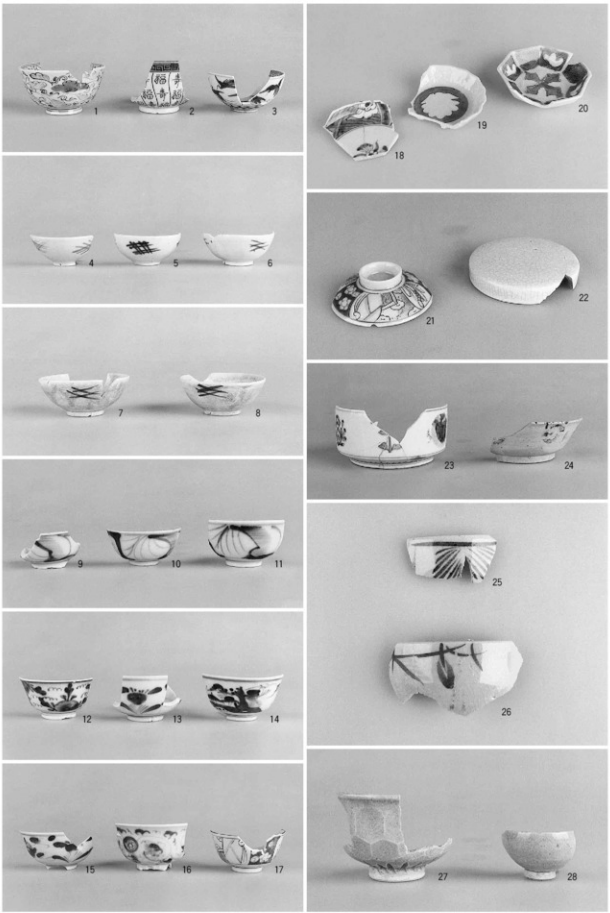
溝 SD02　（西から）

溝 SD03断面　（北から）

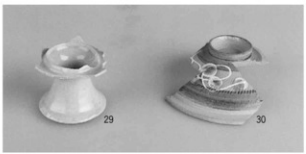
井戸 SE01　（北から）

井戸 SE01　（北西から）

井戸 SE01　（東から）

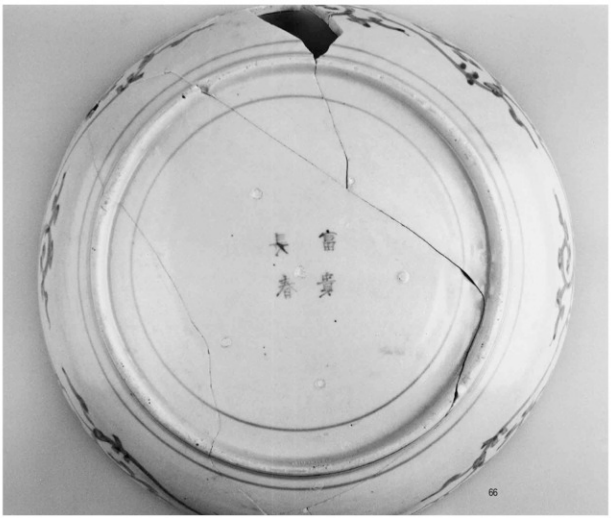


土壙 SK01出土遺物

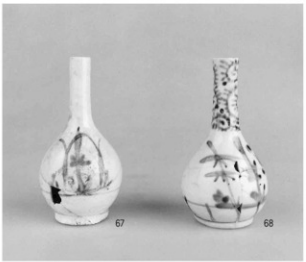


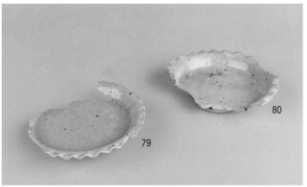
土壙 SK01（29～34）、SK02（35～41）出土遺物

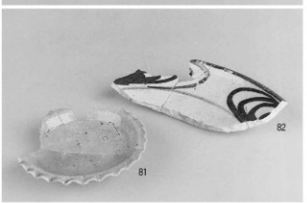
土壙 SK02出土遺物

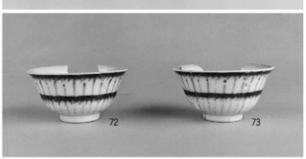


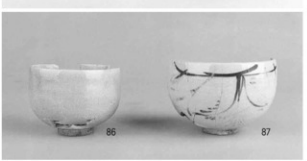
土壙 SK02出土遺物

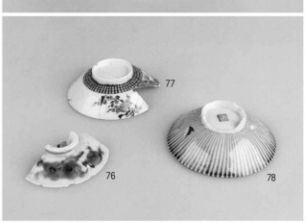










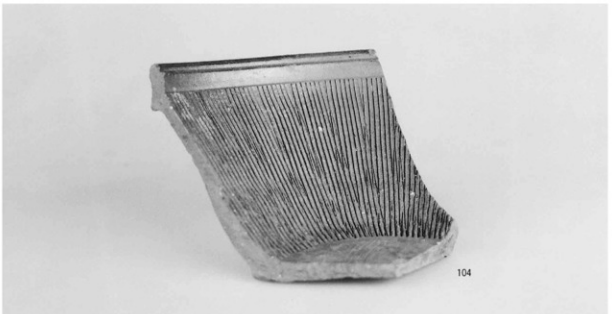


土壙 SK02出土遺物

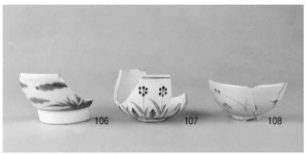
土壙 SK02出土遺物

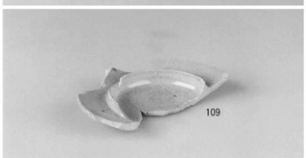
土壙 SK02出土遺物

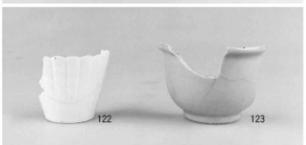
土壙 SK02出土遺物

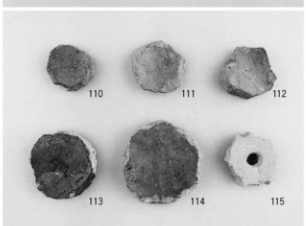


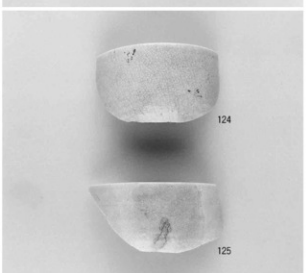
土壙 SK02出土遺物

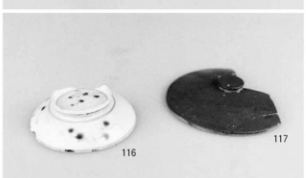


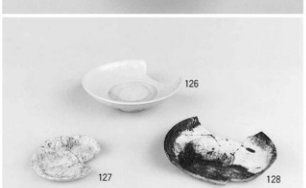


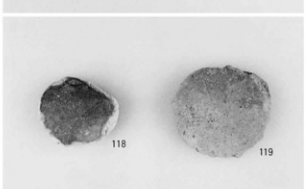


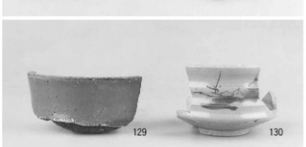




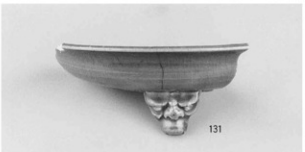


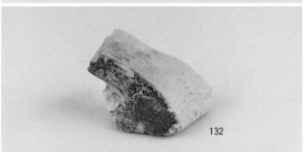


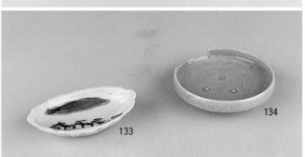


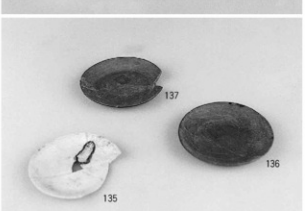


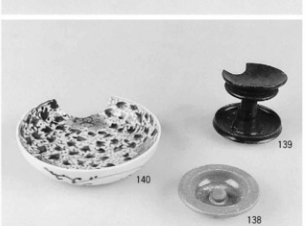
土壙 SK03（106～115）、SK04（116～119）、SK05（120～123）、SK06（124～130）出土遺物

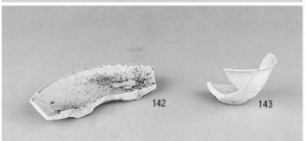


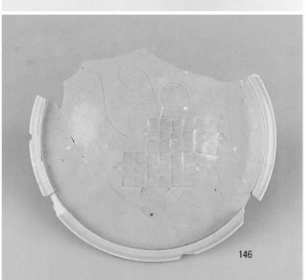


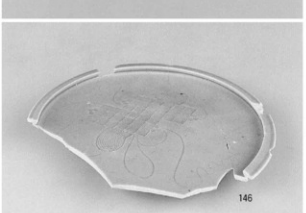




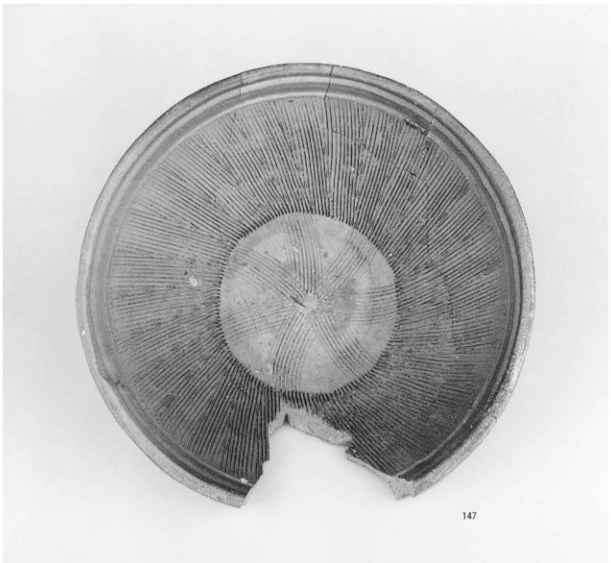








土壙 SK06（131・132）、SK07（133～141）、SK08（142・143）、SK09（144）、SK10（145）、SK11（146）出土遺物



土壙 SK12出土遺物

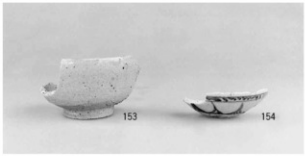
148

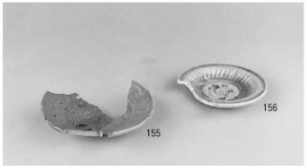
149

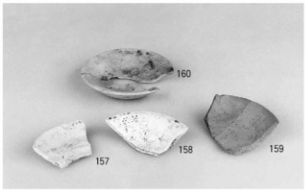
151

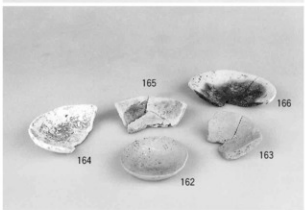
土壙 SK13出土遺物

土壙 SK13出土遺物









土壙 SK13（152）、溝 SD02（152～161）、SD03（162～166）出土遺物

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要20

2010．3．31

発行　徳島市教育委員会
編集　徳島市教育委員会社会教育課
印刷　株式会社教育出版センター